月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.121



皇子と王太女、国を背負う者たちの覚悟

英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

ザナドゥに雛人形が参戦!?

も～っと集まれ！ファルコム学園

2月はやっぱりバレンタイン！

『英雄伝説 暁の軌跡』

『軌跡』シリーズ始まりの物語を振り返る

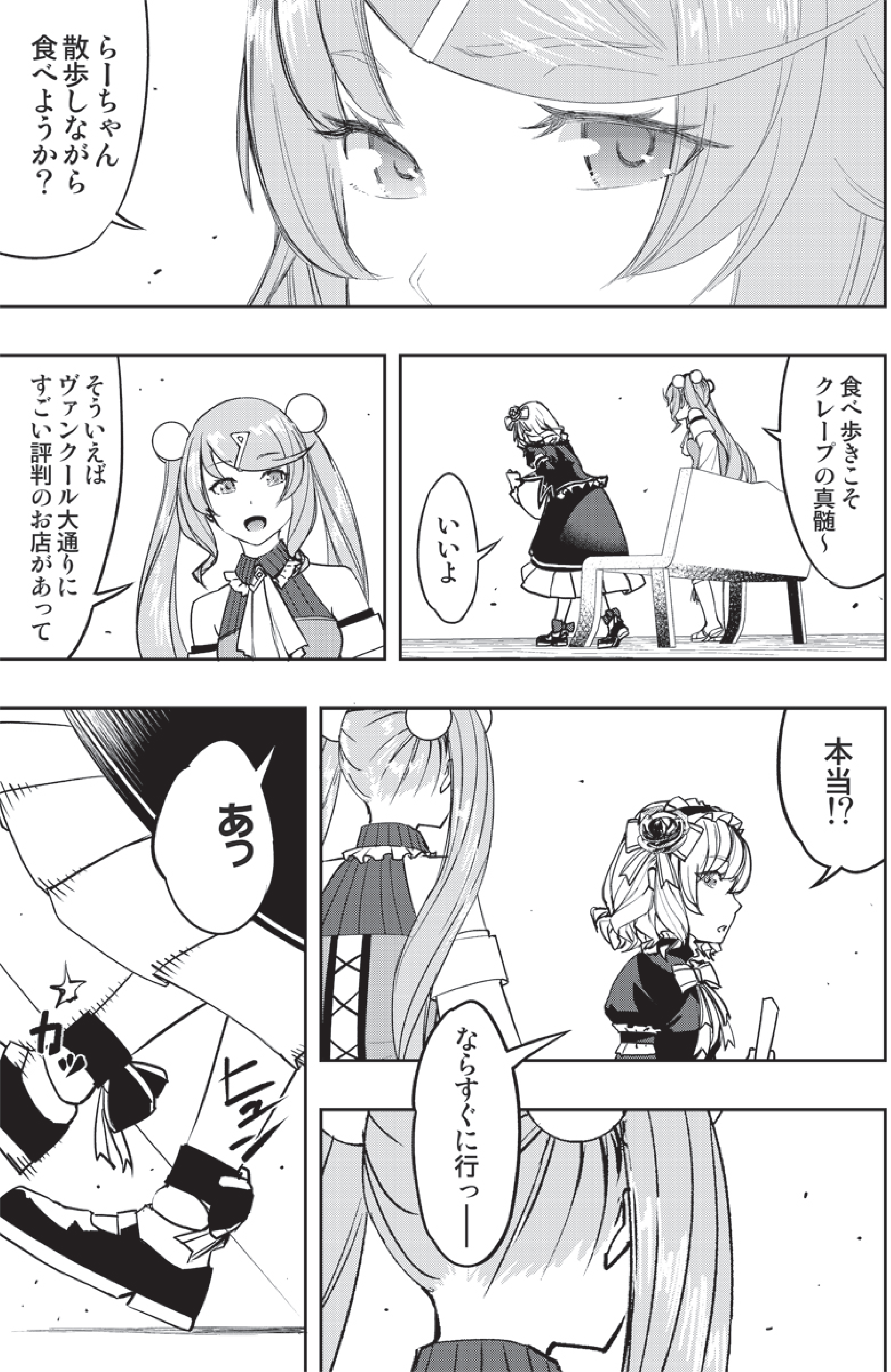
英雄伝説 空の軌跡

ファルコムニュース

連載第2回！

《C》と《Ⅶ》組が再び(？)相まみえる

創の軌跡 THE MISERABLE SINNERS

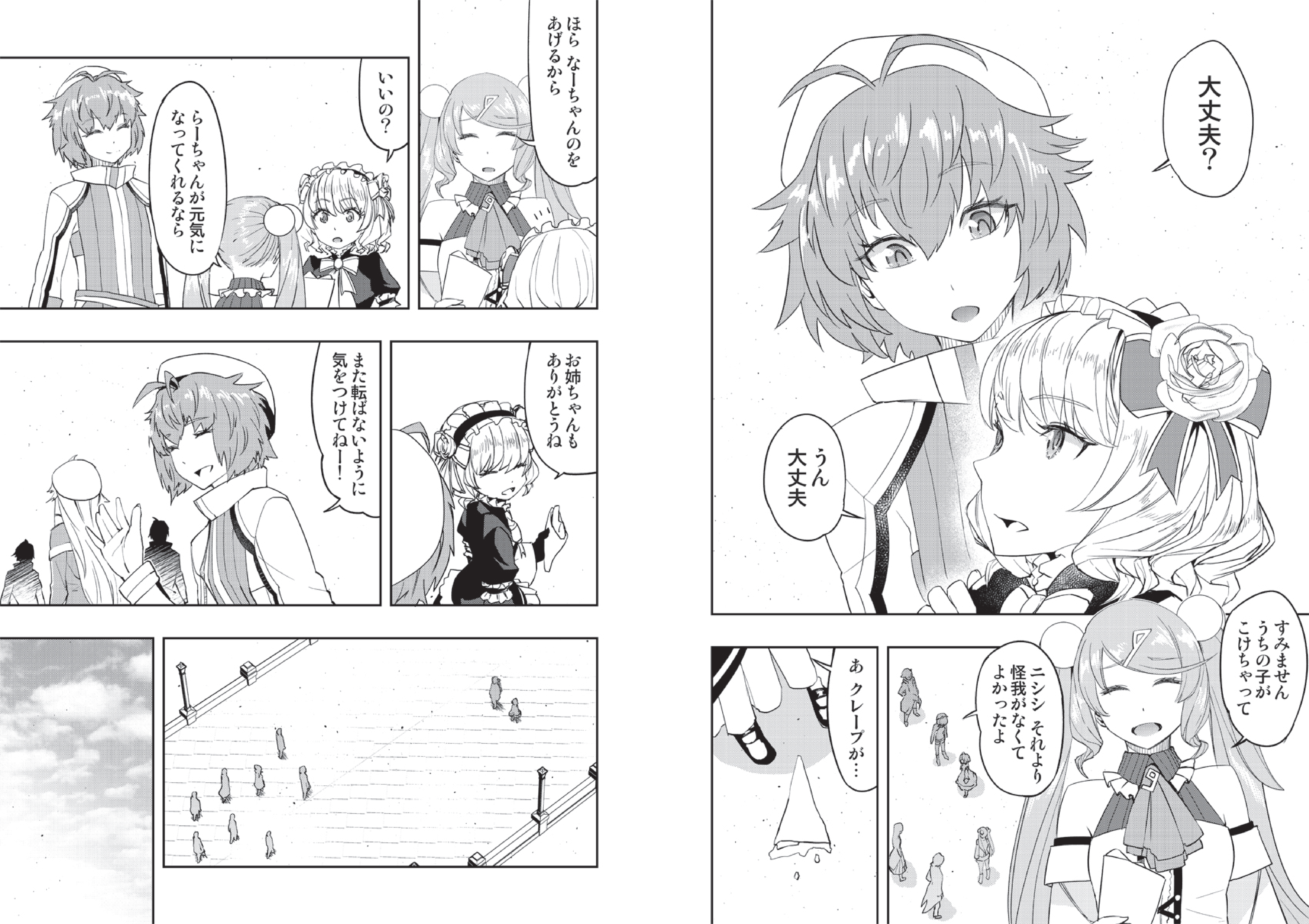


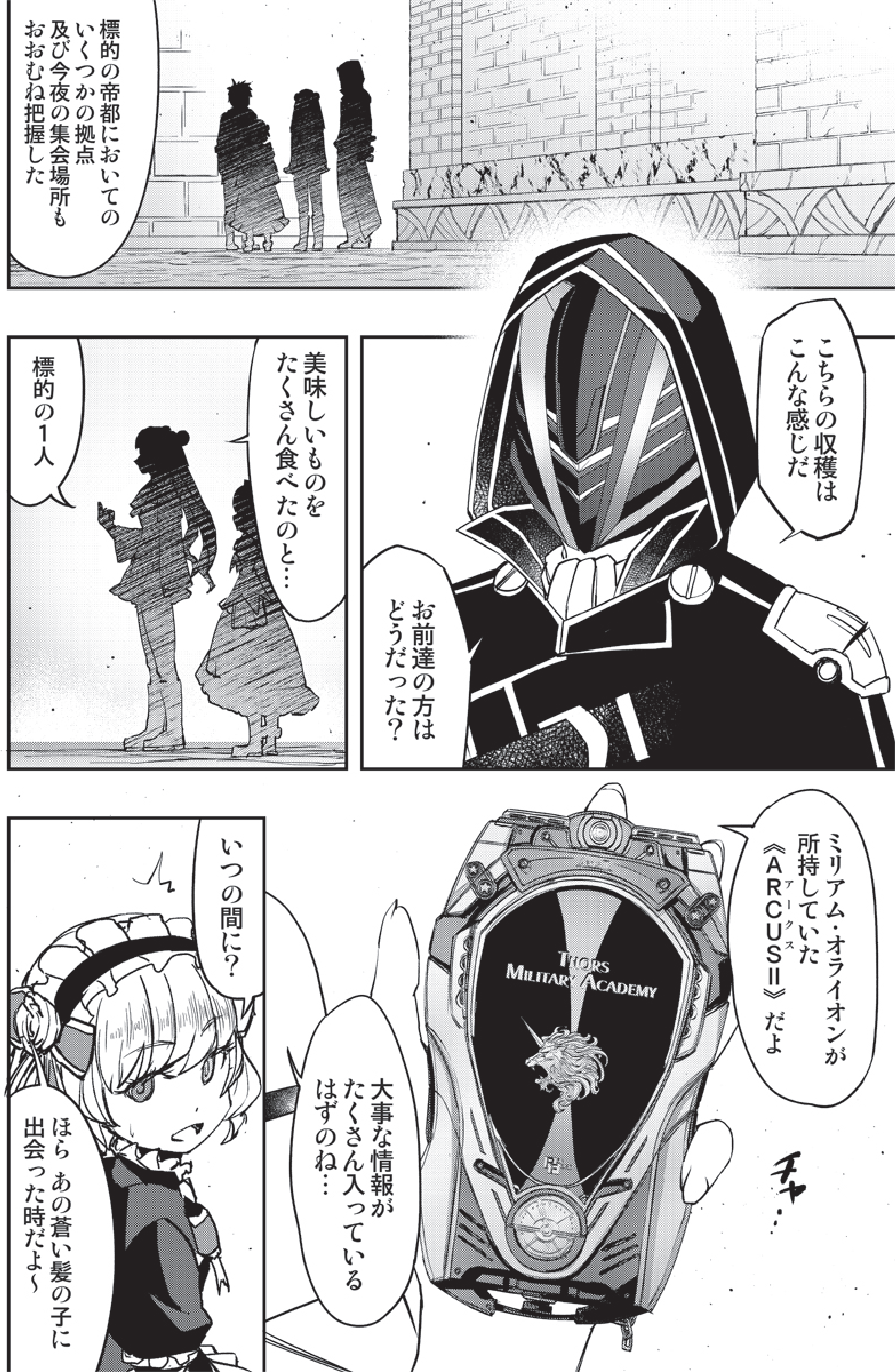
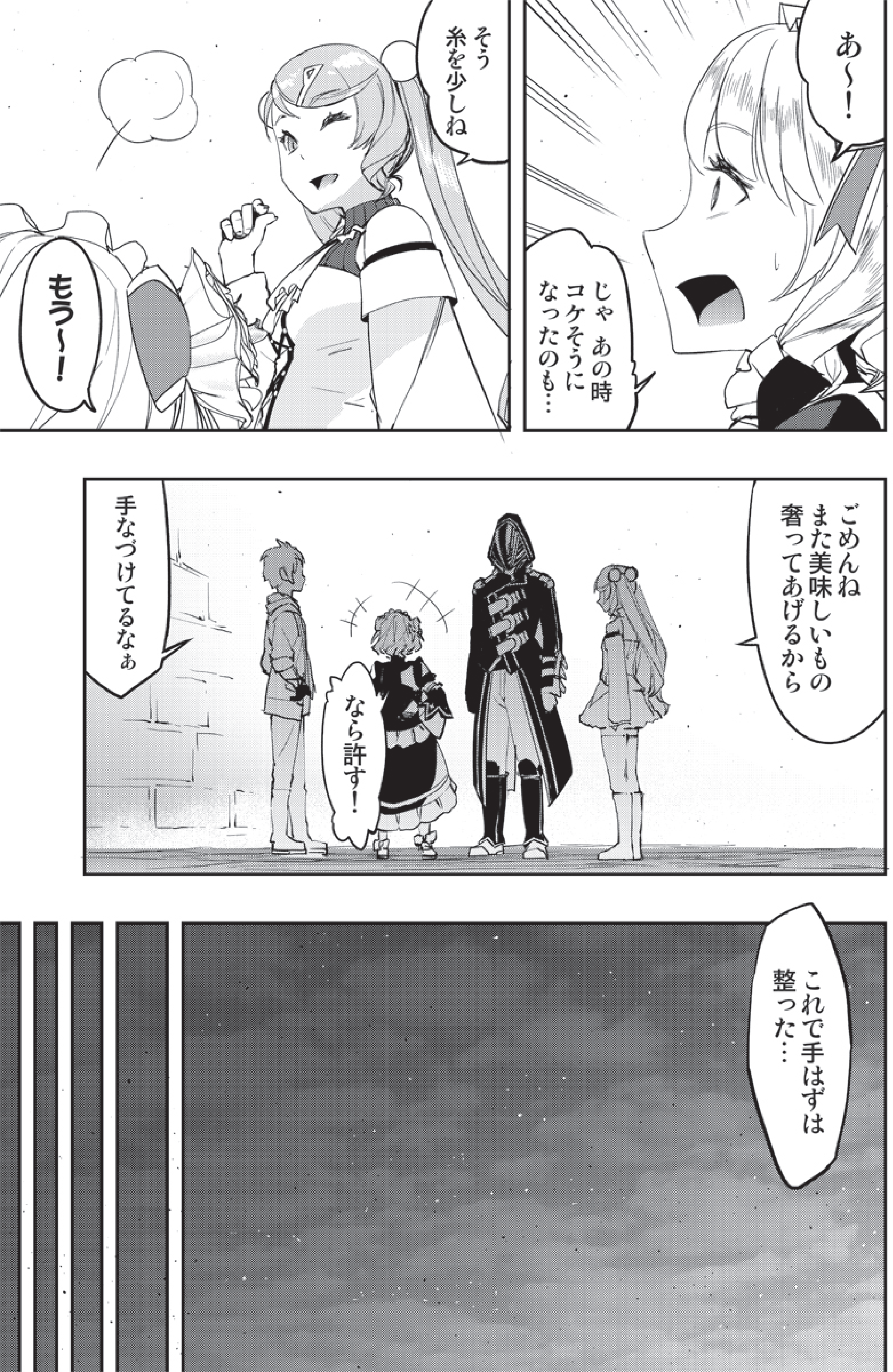


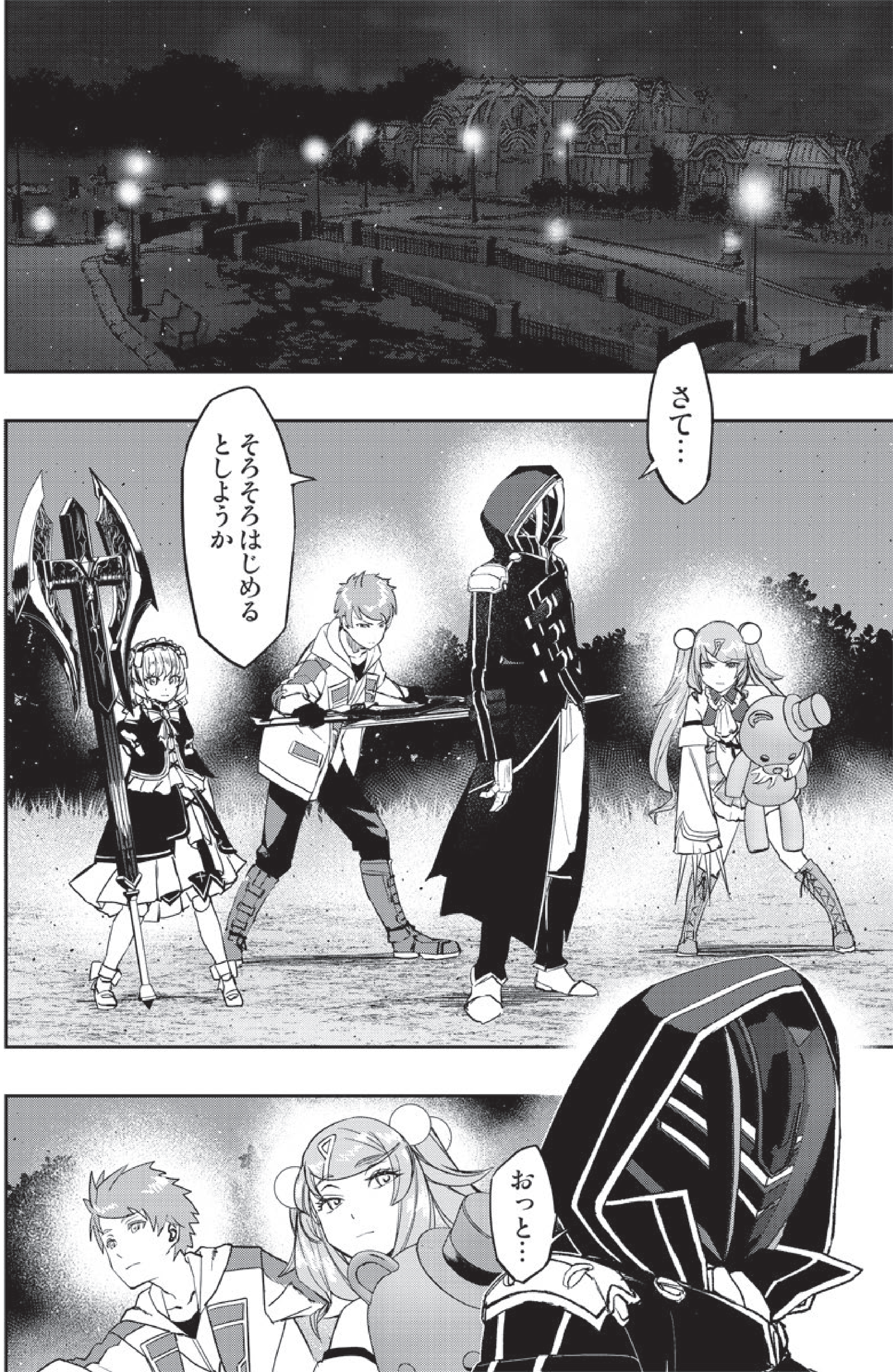
FALCOM MAGAZINE

CONTENTS


THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】
THE MISERABLE SINNERS
漫画 墨天業
原作 日本ファルコム
――よっと
ト


大丈夫？
うん 大丈夫
すみません うちの子がこけちゃって
ニシシ それより 怪我がなくて よかったよ
あ クレープが…
ほら なーちゃんのを あげるから
いいの？
らーちゃんが元気に なってくれるなら
お姉ちゃんも ありがとうね
また転ばないように 気をつけてねー！

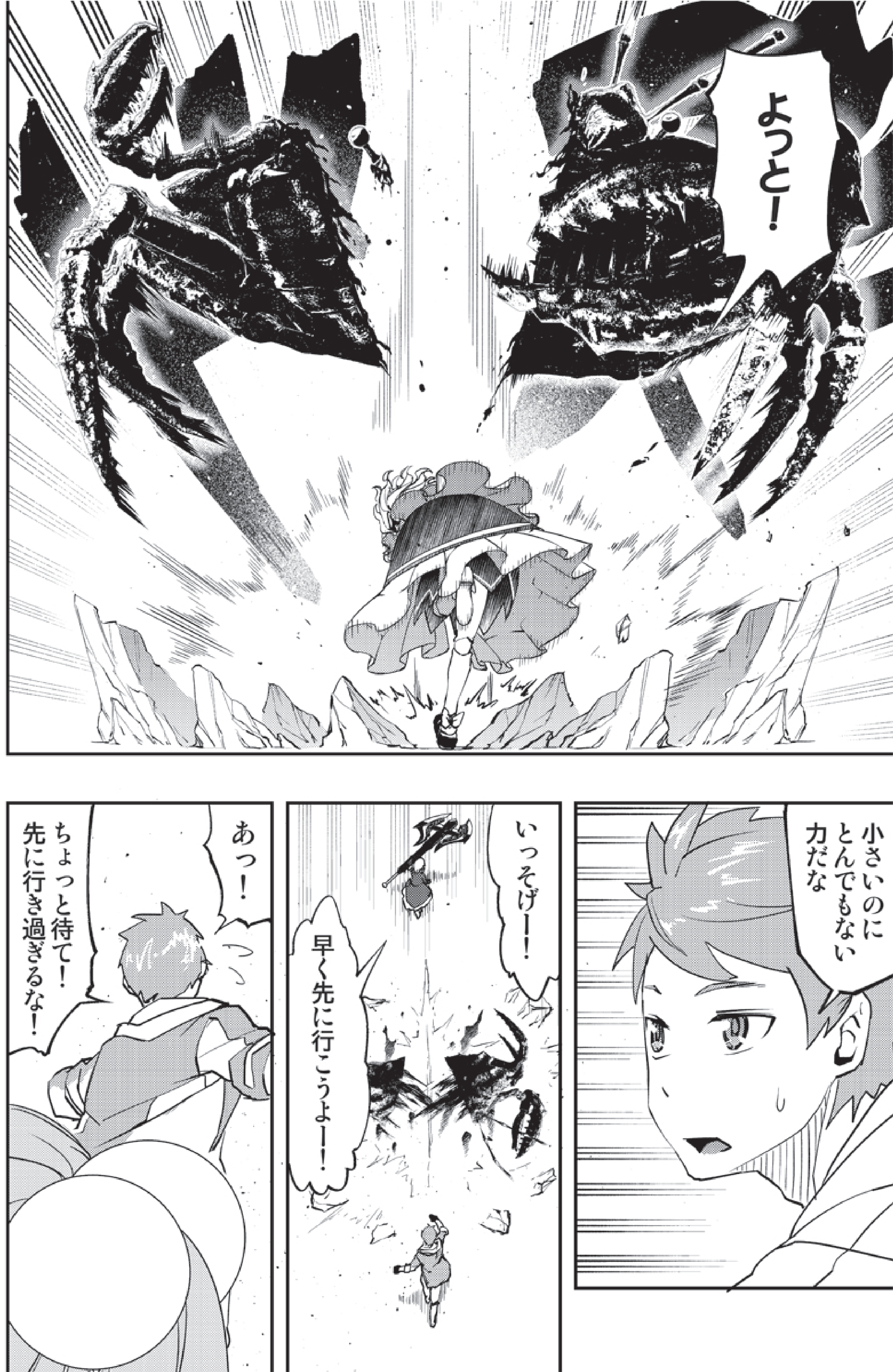

標的の帝都においてのいくつかの拠点及び今夜の集会場所もおおむね把握した
こちらの収穫はこんな感じだ
お前達の方はどうだった？
美味しいものをたくさん食べたのと…
標的の1人
ミリアム・オライオンが所持していた《ARCUSⅡ(アークス)》だよ
THORS MILITARY ACADEMY
チャ…
いつの間に？
大事な情報がたくさん入っているはずのね…
ほら あの蒼い髪の子に出会った時だよ～

あ～！
じゃ あの時コケそうになったのも…
そう 糸を少しね
もう～！
ごめんね また美味しいもの奢ってあげるから
なら許す！
手なづけてるなぁ
これで手はずは整った…


さて…
そろそろはじめるとしようか
おっと…

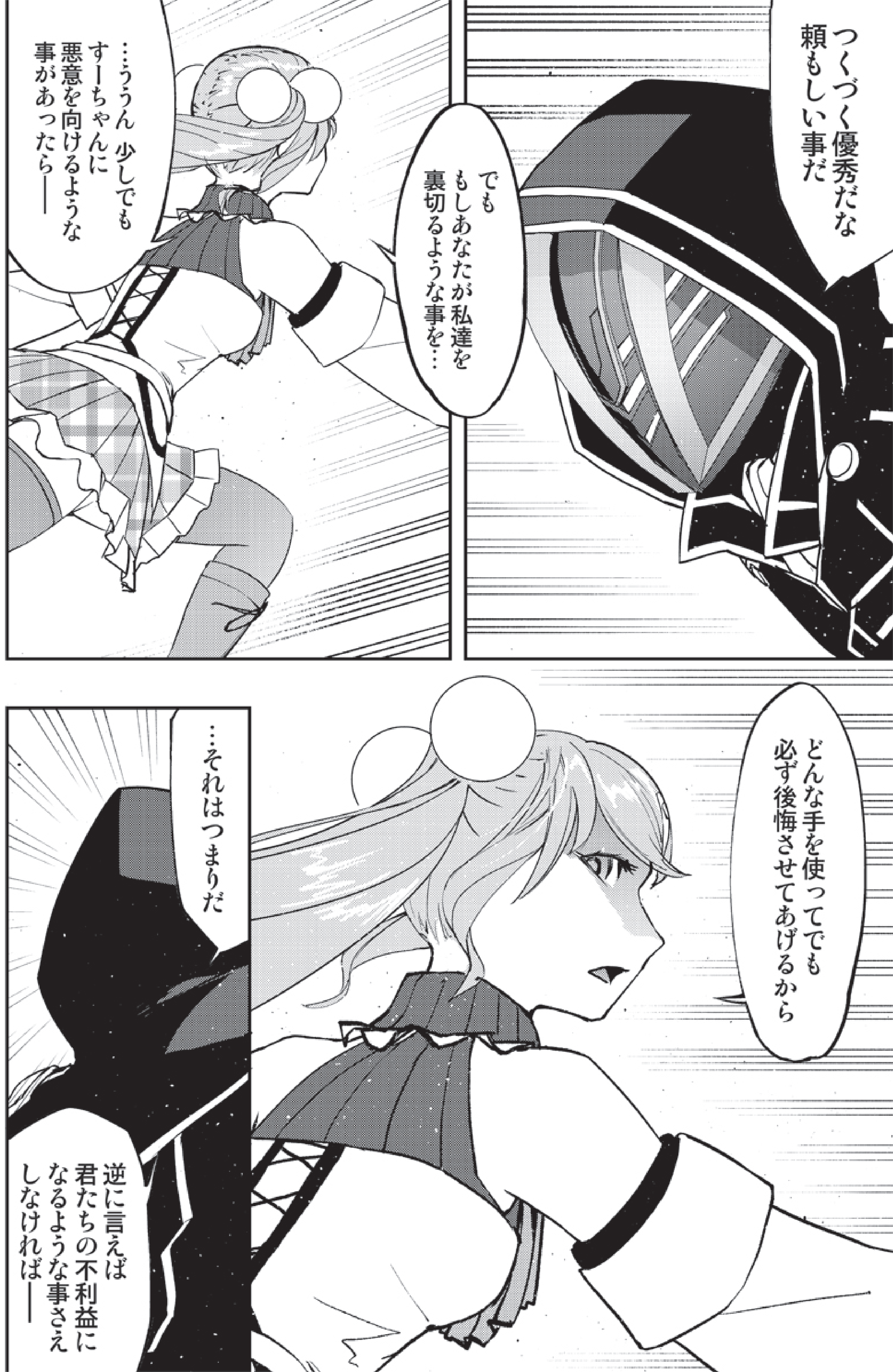

させないよ！何をするかは知らないけど！
こちらも通行止めです
情報局の小兎どもか…
まだ来るな…3人…いや5人か！
ザッ
ザ ザッ


トールズⅦ組 よく私達の動向を 掴めたな
「呼んだ」の 間違いじゃ ないのか
お前達は 何者だ？
改めて 自己紹介を させてもらおう
新生帝国解放戦線の リーダー《C》だ
う～ん それじゃあ…
新生帝国解放戦線の ノインよ！
となると俺は 新生帝国解放戦線の ドライ…だな
じゃあ私は 新生帝国解放戦線の ラ……プッペよ！
ふふ…
ああ！ そこ笑った！
こりゃまた 随分と可愛げのある お仲間たちじゃねぇか？
兄様 本当に彼らが 2年前 私と姫様を 誘拐した…？
リーダーはともかく 少なくともあの 帝国解放戦線では ないだろうな
答えてもらおう お前は何者だ《C》！
その仮面の下が 本物じゃない事は わかっている！

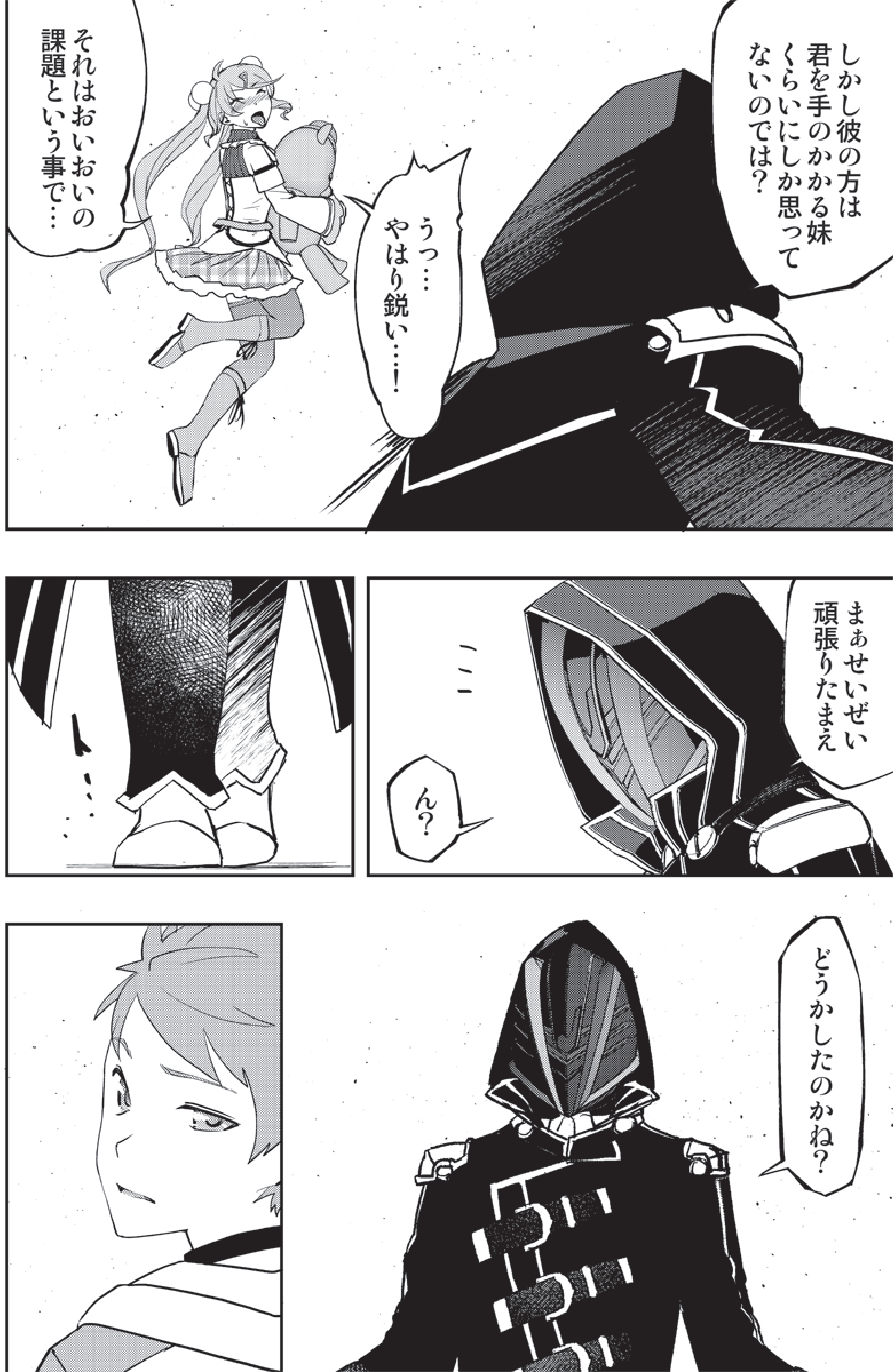

残念ながらここは学校ではない
質問をしたら答えが帰ってくるとは思わないことだな
思ってねぇさ…
答えたくねぇなら無理やりにでも聞き出すだけだからな！
僕の《ARCUSⅡ》も返してもらうからね！
いいよ～
ポイ
え!?
あ ちなみに爆弾仕込んでおいたから
なっ!?
ミリアム!!
ボゴオオ!!
……
タッ
タッ
タッ
タッ

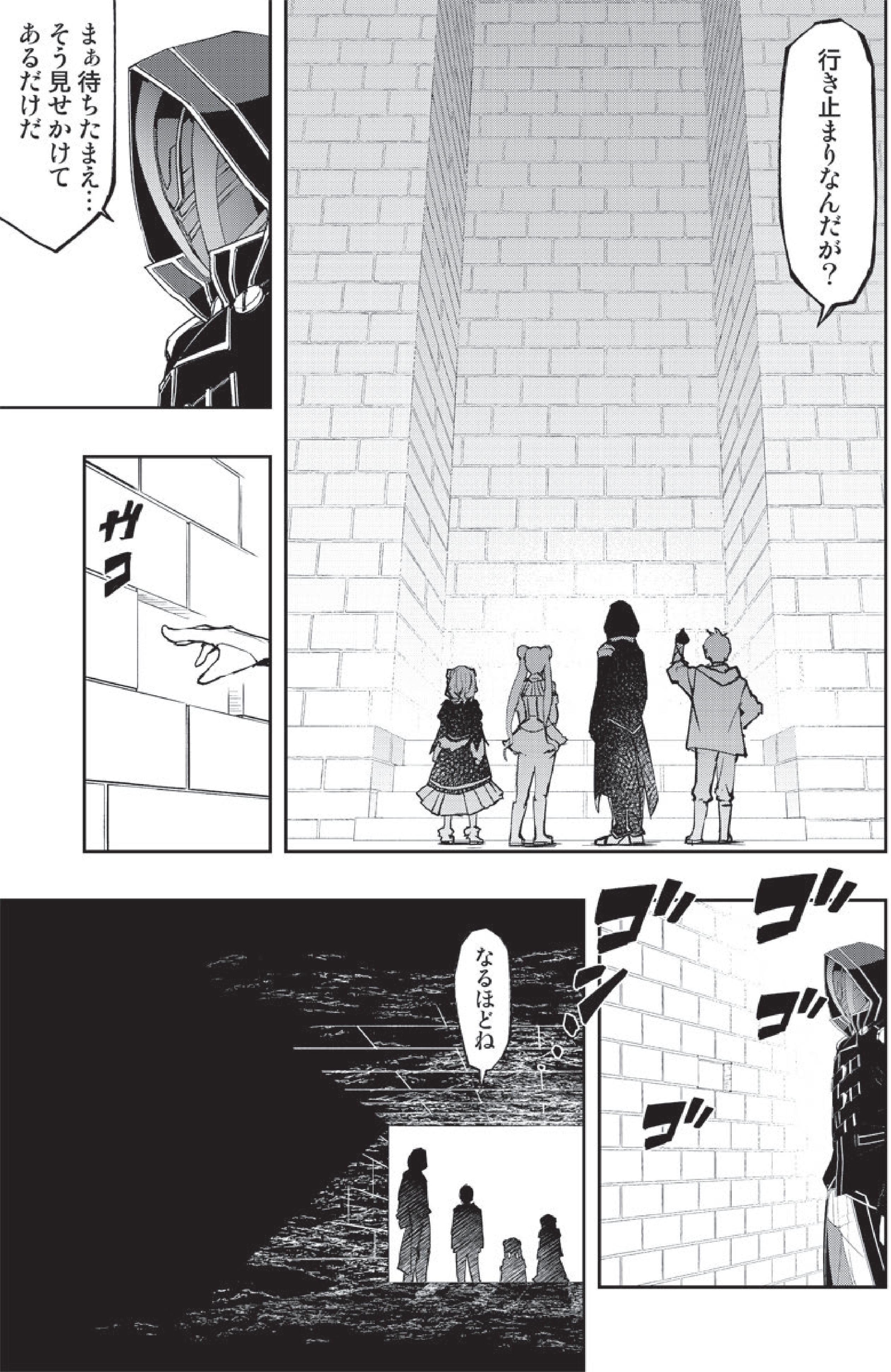

よっと！
小さいのにとんでもない力だな
いっそげー！！
早く先に行こうよー！！
あっ！
ちょっと待て！先に行き過ぎるな！

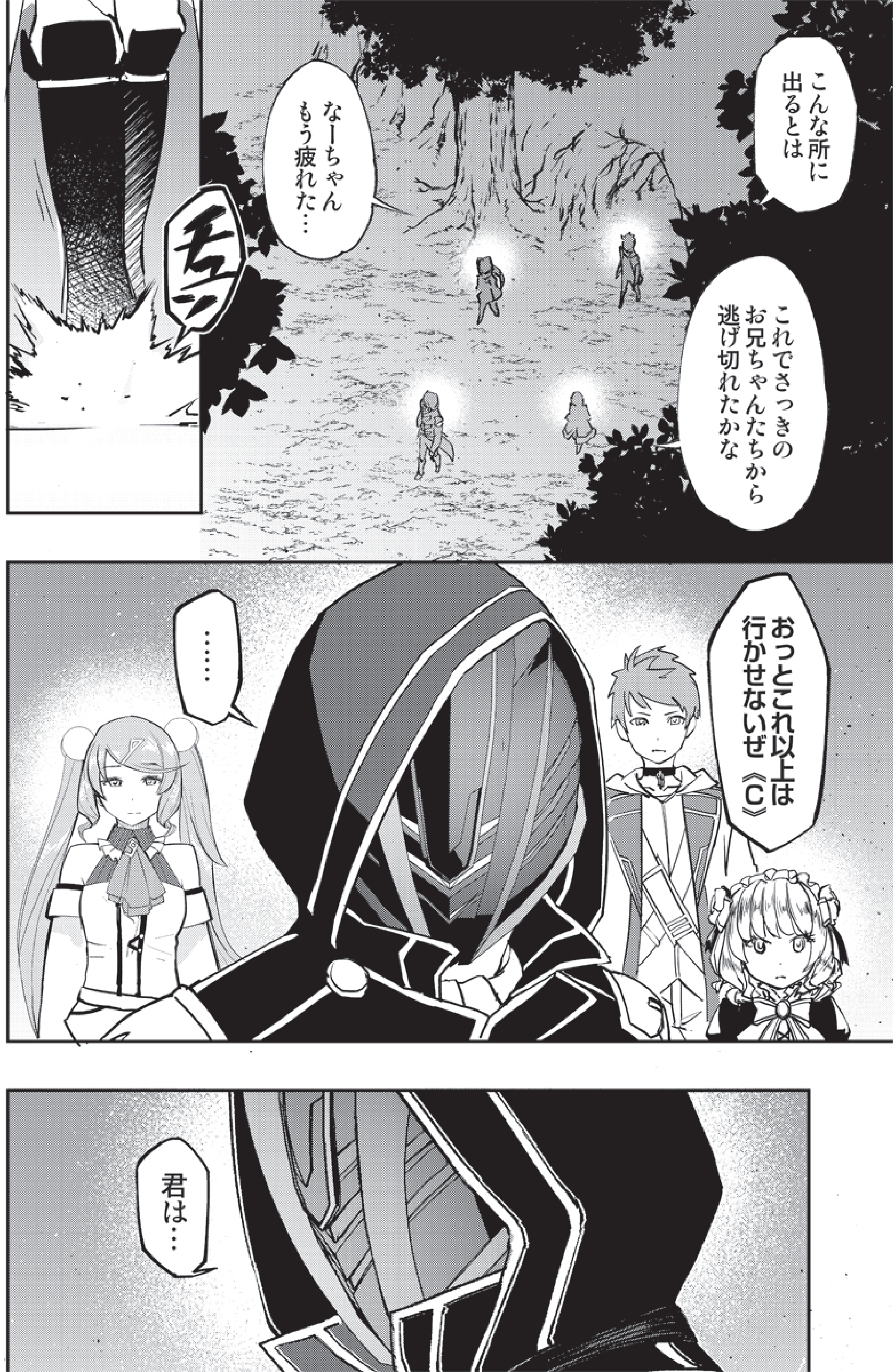

らーちゃんは子供みたいだなぁ…
お前達2人も似たようなものだ
まぁ2人とも…
子供にしては並外れた能力ではあるがな…
……
そうやって人の事を分析するのが好きみたいだけど…
あなたの事も私が監視している事を忘れないで《C》
……
2日間行動した事であなたの正体にはすでにアタリをつけている…
あまりにも情報が錯綜しているからまだ確証はないけどね…


つくづく優秀だな
頼もしい事だ
でも
もしあなたが私達を
裏切るような事を…
…ううん 少しでも
すーちゃんに
悪意を向けるような
事があったら——
どんな手を使ってでも
必ず後悔させてあげるから
…それはつまりだ
逆に言えば
君たちの不利益に
なるような事さえ
しなければ——


私達は
いつまでも
「愉快な仲間たち」
でいられる
私は優秀な協力者を得られて
君たちは莫大な報酬を得られる
違うかね?
…ふふ
違わないよ
そういう
悪党っぽいのに
単純明快なところ
なーちゃんは
好きだよ~
あ でも
恋愛感情の「好き」
じゃないから
なーちゃんにはすでに
将来を決めた相手がいるの
……


しかし彼の方は君を手のかかる妹くらいにしか思ってないのでは？
うっ…やはり鋭い…！
それはおいおいの課題という事で…
まぁせいぜい頑張りたまえ
ん？
どうかしたのかね？


行き止まりなんだが？
まぁ待ちたまえ…そう見せかけてあるだけだ
ガコ
ゴゴ
ゴゴ
ゴ
ゴ
ゴ
なるほどね

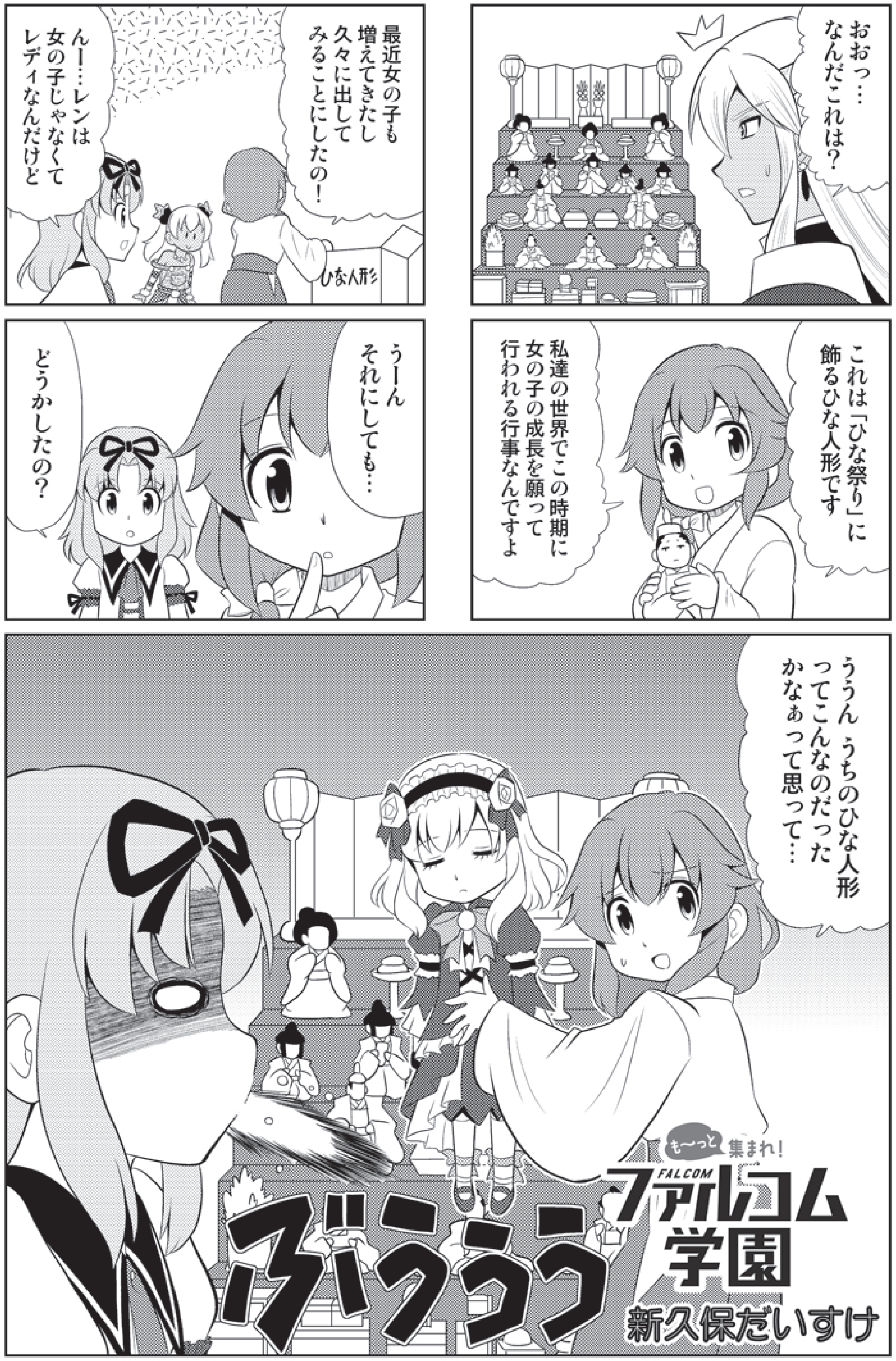

こんな所に出るとは
なーちゃんもう疲れた…
これでさっきのお兄ちゃんたちから逃げ切れたかな
おっとこれ以上は行かせないぜ《C》
……
君は…

クロウ・アームブラスト
さすがに俺の事は知ってるか…先代としては
…嬉しいぜ
Fortsetzung folgt

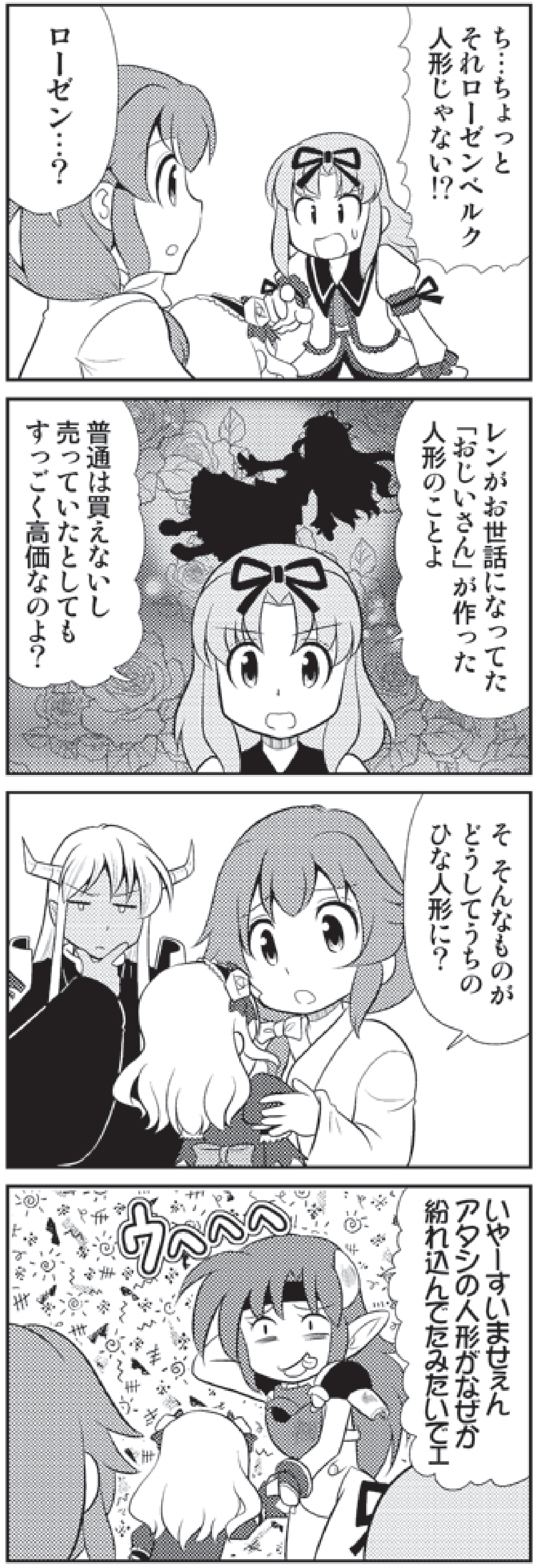

『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！ 平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け！
愛と希望の流れ星！
魔法少女
まじかる☆アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中！
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら➡www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら➡www.field-y.co.jp/falcombooks


英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお 漫画／さがら梨々
A5判 160P 定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks

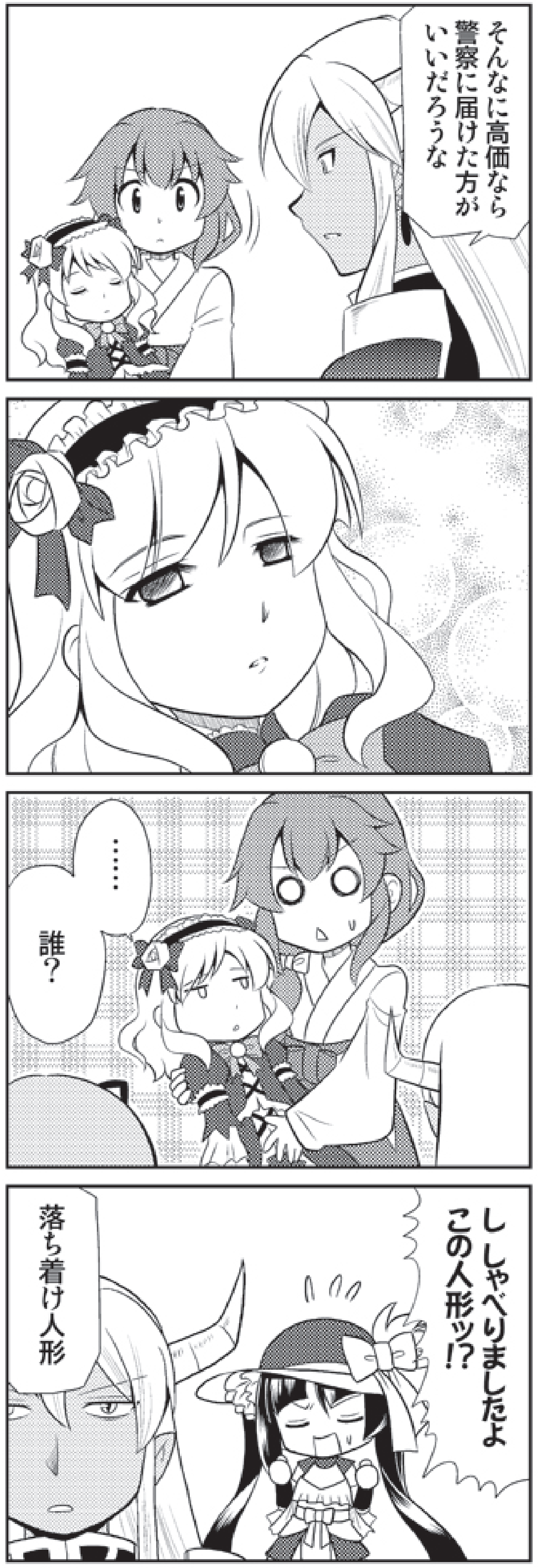
★単行本第2巻、ホントに絶賛発売中ですよ!★



高価な人形



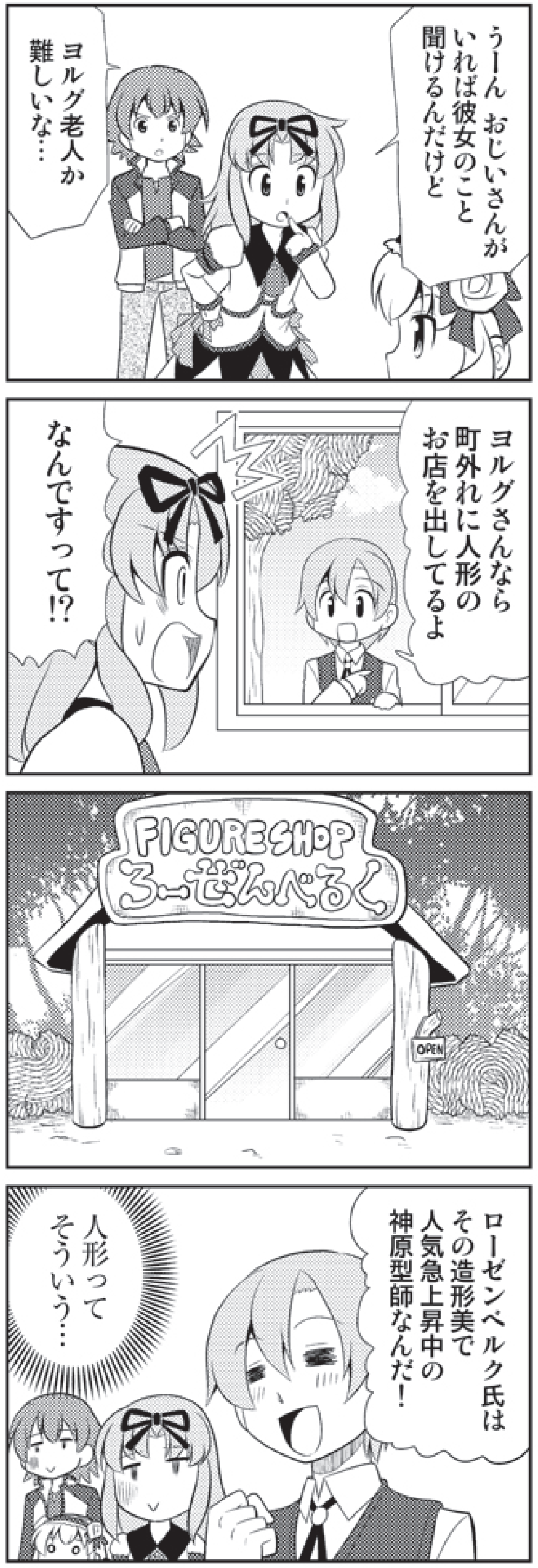
しゃべる人形



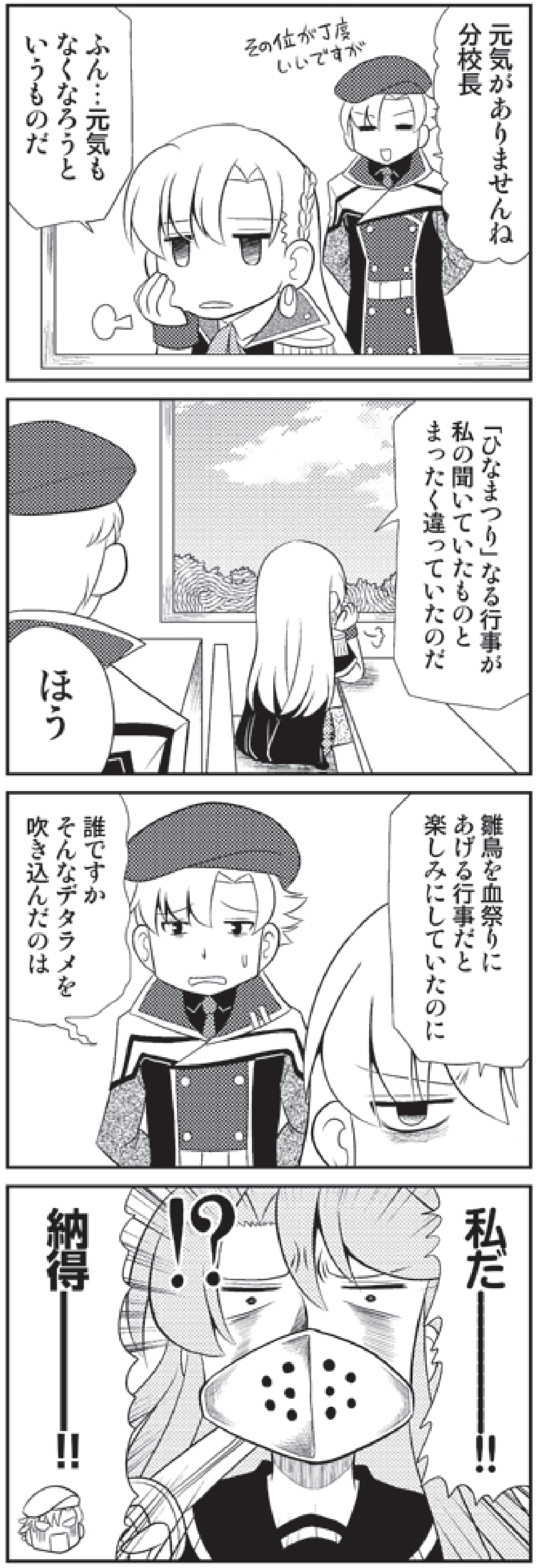
すでにいる人達



ヨルグ老人の現在



雛祭り



こどもの日



歪んだ薫陶



突然のキオク



人形と食事



お名前格付けチェック



無邪気な禁句



なつかしい階段



君に贈る言葉



※Vol.117参照

ちゃんと普通の女の子





ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！　新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
ふぁるこむコミックざんまい
価格：本体920円＋税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースIX」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！ 待望の第2巻だよ！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円＋税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y
発行：フィールドワイ フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
発売：メディアパル ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks


空の軌跡 SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
オリ……
…ヴァルト？
…いやいや どう見たって オリビエでしょ？
髪たばねてるだけ
んん…
でも… 自分のこと 皇帝の一子って 言ったわよ…
えー!…
…じゃあ あの人は オリビエ…
…に そっくりな 帝国の皇子様 …ってこと？
いや


あの人は 間違いなく オリビエさんだ
そして彼は 間違いなく
エレボニア帝国の オリヴァルト皇子 なんだよ
…だったら オリビエは ずっと…
あたしたちを
騙してきた っていうの…？
どうかしたのかね？
もしかして 私の顔を ご存知だったかな？


…いえ
お初にお目にかかります
オリヴァルト皇子
お名前だけは
存じていましたが
…まあ
皇子と言っても
公式の場に
出ることは
少ないから
顔を
知らなくても
別段気にしては
いないよ
例えそれが
かつての
縁談相手の顔
だったとしてもね
え
だが
今回の事態は
知らぬ存ぜぬでは
済まされない


貴国上空に
浮かぶ
巨大構造物
あれが今
帝国本土でどのように
噂されているかは
ご存知かな？
……
いえ…
寡聞にして…
ならば
教えて
あげよう
あれは
リベール王国軍が
開発した新兵器
らしい
リベール王国は
エレボニア帝国に
あの兵器で
10年前の復讐を
企てているのだ…と


そんな…
誤解です！
わたくしたちは
そんな…
誤解？
どう
誤って
いると？
現に我が帝国は
導力の停止という攻撃を
今もなお受け続けている
そしてその攻撃は
王国領空にある
巨大構造物から
発せられている
この見解に
何か間違いが
あるとでも？

……
いえ…
その通りです…
…ですが
あれは誓って
リベール王国の
兵器では
ありません！
ましてや
導力停止現象を利用して
他国を侵略する行為を
わたくしたちが行うなど
断じて！
ありえません!!
ならばそれを
証明できるかね？

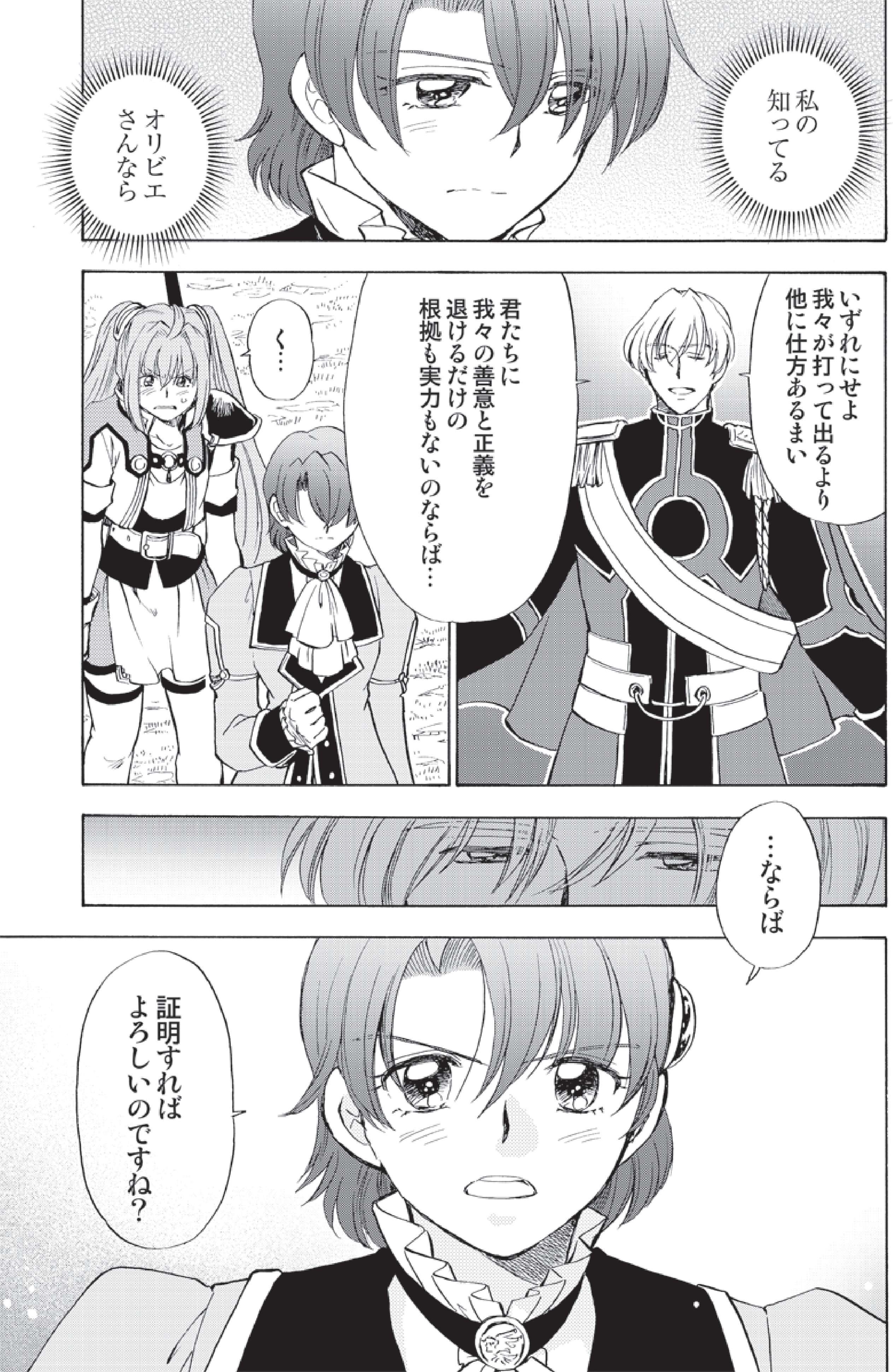

口先だけの平和なら いくらでも 唱えられる
だがそれだけで 丸め込めるほど 帝国軍は甘くないんだ
貴女の言葉を 信じさせたい のであれば
ここにいる 誰の目にも 見える形にして 提示して もらいたい
形……
それが できないので あれば
こちらのやり方を 強行させてもらう しかないのだよ


い……っ
いいっ加減に しなさいよ!
もーっ
なんでそんな 意地悪なことばっか 言うわけっ!?
エ…… エステルさん……
は!
ごめん! クローゼ!
……っ
でも……
……オリビエだって わかってるん でしょ!?
リベールが今 どんな状況かって ことぐらいは!
あれも 結社の仕業なの!
結社があれを 出現させて リベールに 悪さを 仕掛けてるのよ!


ほう？
もしかして その結社と いうのは 王国で問題に なっているという 犯罪組織のことかね？
忘れたの!?
結社《身喰らう蛇》よ！
結社《身喰らう蛇》…
それが 今回の事態の 原因だというのか？
そうよ！
彼らの陰謀を 止めさえすれば すべての問題は 解決するんだから！
どうして
この人は
こんな交渉を 続けている んだろう

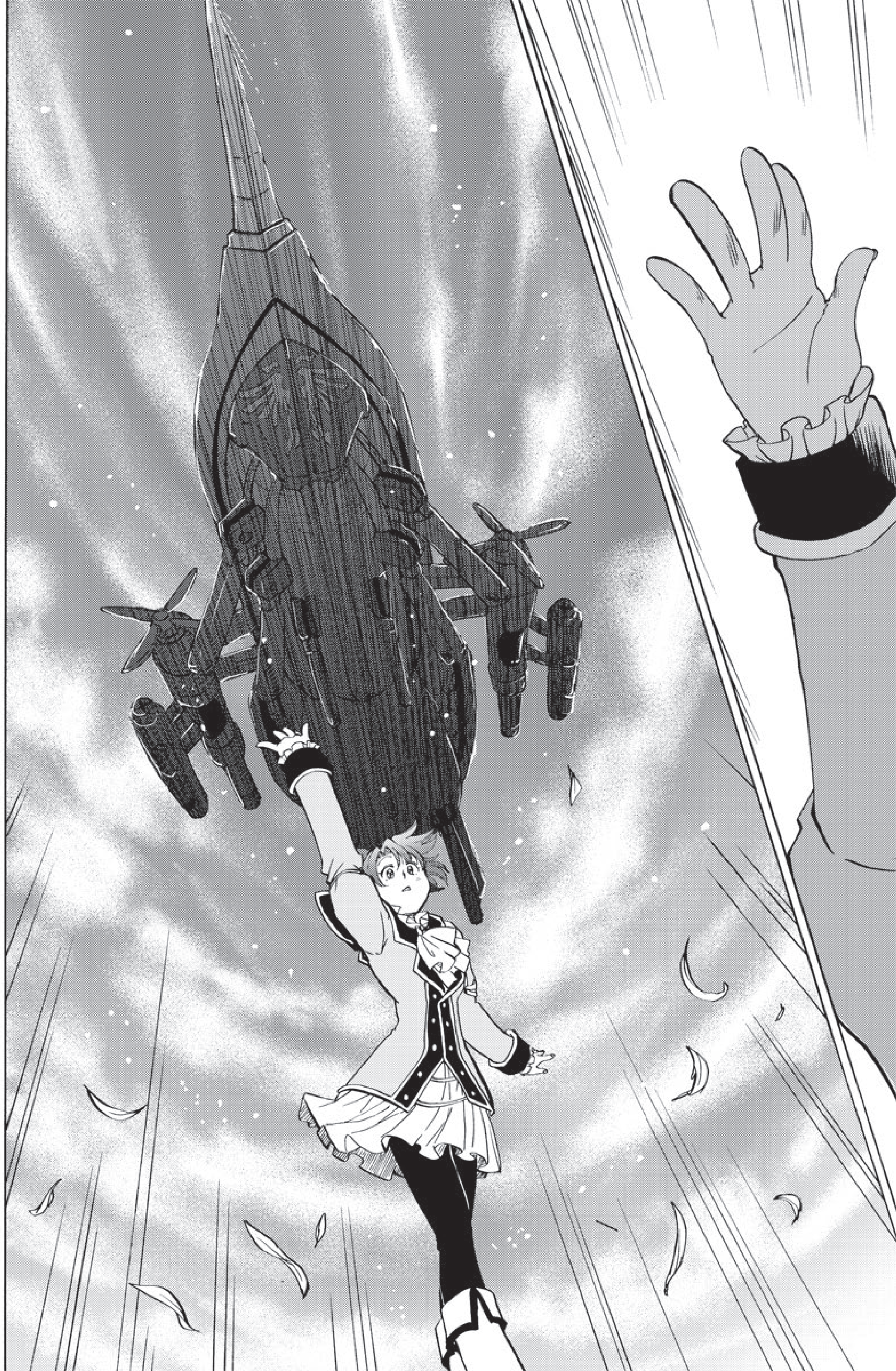

圧倒的な戦力差が ある相手に対して
話し合いなんて する必要はない
戦力にまかせて 押し入ってしまえば それだけで事は 済むのだから
相手の国を 陥としたいと
本当に 思って いるのなら
しかし 仮にその 結社とやらが 犯人だとして
この異常現象を 止める方法が 果たして君たちに あるのかね？


そ…
それは…
ないというのであれば
我々も手をこまねいているつもりはない
なのにどうして
この人は
この蒸気戦車には火薬式の大砲を搭載しているのだ
貴国の中に入り込みあの浮遊物体に近づいて発射してみるというのはどうだろう？
じょ…
冗談でしょ!?
大砲なんかで空に浮かんでる物を撃ち落とせるわけないじゃない！
エレボニア帝国のオリヴァルト皇子は…
やってみなければわかるまい？


私の知ってる
オリビエさんなら
いずれにせよ我々が打って出るより他に仕方あるまい
君たちに我々の善意と正義を退けるだけの根拠も実力もないのならば…
く…
…ならば
証明すればよろしいのですね？


この状況にあって あの浮遊物体を なんとかする可能性を 提示できれば
わたくしたちに しばしの猶予を いただけるのですね
まぁ… そうせざるを 得ないだろうな
皇子!?
貴国自らで 解決できるのならば 我々がわざわざ 動く必要は ないのだから


困ります! そんな方向に 話を持って いかれては…!
落ち着け 中将
不戦条約を結んだ相手に このくらいの譲歩は 当然の礼儀だろう?
それに
あくまで 証明できれば
…だ
いいだろう
黄金の軍馬の紋章と 皇族たる私の名に賭けて 一時的な撤退を 約束しよう
…では
見せてみたまえ!
その手を
空に掲げて!




う…
うそ…っ
馬鹿な！
次回に続く



英雄伝説 零の軌跡
FB ファルコム BOOKS
午後の紅茶にお砂糖を
著者:むらさきゆきや
イラスト:窪茶
こんな『零の軌跡』もアリ!?
日本ファルコムの大ヒット RPG『英雄伝説 零の軌跡/碧の軌跡』の主人公【特務支援課】は意外とまったり!? 本編とはひと味違った彼らのゆる〜い毎日を描いて『月刊ファルコムマガジン』で大人気を博したノベライズ作品が単行本で登場!
好評発売中!!
定価:1,100円+税
ISBN:978-4-89610-255-0
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



運命に導かれるように再び出逢ったエステルとヨシュア。同時に、世に混乱を求める《身喰らう蛇》の秘密計画が実体となって姿を表す。リベール王国全土を巻き込む混沌の行方は!? 緊迫の第5巻!
《結社》との決戦の刻、迫る!
英雄伝説 空の軌跡 SC 5
ソラノキセキSC
著者:啄木鳥しんき
原作:日本ファルコム
定価:本体 900 円+税
ISBN 978-4-8021-3211-4
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©KITSUTSUKI SHINKI ©2020 FIELD-Y
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

オンラインRPG『RED STONE』×『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ』コラボレーションイベント開催中！





ストーリーRPG「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ-THE END OF SAGA-」と、この2月にサービス開始16周年を迎えたオンラインRPG「RED STONE（レッドストーン）」とのコラボレーションイベントが開催中。「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ」に登場するキャラクターたちを模したクリーチャーや装備アイテム等が登場する本イベントに今すぐ参戦しよう！
詳細は特設ページにて公開中。



「英雄伝説閃の軌跡Ⅳ-THE END OF SAGA-」

ゼムリア大陸西部に位置する巨大軍事国家・エレボニア帝国を舞台とした「英雄伝説 閃の軌跡」シリーズ4部作の最終章。帝国を蝕む悪しき“呪い”が撒き散らされ、カルバード共和国との開戦へ突き進む中で、主人公リィン・シュバルツァーをはじめとするトールズ士官学院・新旧《Ⅶ組》の若者たちが活躍する姿を壮大なスケールで描く。
2021年には舞台を一新したシリーズ最新作「英雄伝説 黎の軌跡（クロノキセキ）」を発売予定。

オンラインRPG「RED STONE」とは

2021年2月に正式サービス開始から16周年を迎える基本プレイ無料のオンラインRPG。24種類の魅力あふれるキャラクターを使い分けながら、“不老不死と富を約束する石”――RED STONEを求める冒険の旅を進めていく。ノートPCでも簡単操作でサクサク遊べるオンラインRPGとして、幅広いユーザーから支持を集めている。



■『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ-THE END OF SAGA-』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/sen4/

■Pmangチャンネル
https://www.youtube.com/c/PmangCH/featured

■『RED STONE』公式サイト
http://www.redsonline.jp/

「シナリオの数だけ世界がある――」不朽の名作RPG『ソーサリアン』がG-MODEアーカイブスとしてNintendo Switchに登場！



PCやコンシューマ向けゲームとして人気を博したアクションRPG「ソーサリアン」の携帯アプリ版「アドバンスド ソーサリアン」を完全移植。一新されたグラフィック、多彩なエフェクト演出が、ファンタジー世界の冒険を盛り上げます。プレイヤーは、4種類のクラスから4人のパーティを作成し、各シナリオに自由に挑戦できます。それぞれのシナリオには謎解きや迷路の要素がふんだんに盛り込まれており、手ごたえ十分。
チュートリアルや、ジー・モードオリジナルのシナリオを含む「基本シナリオ（16章）」と、追加シナリオ「戦国ソーサリアン（5章）」「ピラミッド・ソーサリアン（5章）」が収録されています。

■製品情報
タイトル：ソーサリアン
ジャンル：アクションRPG
プレイ人数：1人
価格：500円（税込）
2021年2月18日配信







■製品紹介ページ
https://gmodecorp.com/gmodearchives/sorcerian/

『英雄伝説 創の軌跡』ラピス・ローゼンベルクの抱き枕カバー発売決定！

大人気シリーズ最新作『英雄伝説 創の軌跡』より、ラピス・ローゼンベルクの抱き枕カバーが限定イラストによるデザインで発売。お見逃しなく！



サイズ：W500mm × H1600mm
素　材：ライクトロン（2WAYトリコット）

発売日：2021年5月予定
価　格：13,800円（税・送料込み）
発売元：株式会社フジボウル

■商品ページ
http://dakimakura.shop/details.php?title=24

■予約期間
2021年3月8日（月）まで

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
２月はアネラスがあのイベントをモチーフとした衣装に！　さらに、ティオが一足早くお雛様に!?

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj



お雛様・ティオ

桃の節句という言葉通り、ピンクのイメージが強い雛祭りだが、ティオは自身の髪色に近い青い衣装をチョイス。（着ぐるみを除いて）スマートな衣装を身につけることが多いティオだけに、新鮮な佇まいだ。

2月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



バレンタイン・アネラス

アネラスはバレンタインデーということでチョコレートをモチーフとした衣装に。可愛いもの好きのアネラスがこんなに可愛い衣装を着たらテンションMAX間違いなし！　少し照れた表情もGOOD！

3月の新規衣装替えキャラクターは？

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

扉の向こうに青空しか見えないな、とは思っていたのだ。
普通ならば見えるはずの街並みが大扉の向こうにはなくて、人々が行き交う広場のようなところだけが見えていた。おかしいなとは思っていたのだけれど。
「な、なにこれ！」
目の前に広がった景色にエステルは目を奪われてしまう。
工房の玄関を出た先は広場になっている。花やお菓子を売っている屋台が出ていて、人通りも賑やかだった。
だが、広場の先には何もなかった――空しか見えない。
端まで歩いていくと、そこから地面は下っていて、街並みを一望のもと見下ろすことができた。
「山の上に出たんだ！」
中央工房は山の上に造られていたわけだ。街は山の下に広がっていて、ここからはそれがぜんぶ見てとれる。
「これが『工房都市』ツァイスか……。広いな」

英雄伝説 空の軌跡3 ～王都繚乱～

『創の軌跡』の発売を記念して
『軌跡』シリーズの原点を振り返る！

第2回



©MIYABI HASEGAWA , WADARCO

リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報
好評発売中
著　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　　価:1,400円(税別)

下る山肌を覆うようにして大きな階段が造られている。
しかもその階段は、人が立ったままで昇り降りしている。階段は左右に区切られていて、それぞれ昇ってくる人と降りていく人の列に別れていた。
「この階段、動いている、の？」
「そう……みたいだね。動く階段だ」
ヨシュアも呆然とした声になっていた。
「た、たしかにこんな長い坂は登り降り大変そうだけど……だからといって機械で階段を動かしちゃうなんて！　あたし、この街に着いてから驚いてばっかりのような気がする」
山の下の洞窟から直接入れる建物といい、十人以上も乗れそうな昇降機といい、山を昇り降りできる動く階段といい……どれ一つとってもエステルが初めて見るものだった。
「同感。ほら、見てごらんよ」
ヨシュアが振り返りながら言った。
釣られるようにエステルも後ろを振り返り、絶句した。
「うわあ……！」
中央工房の全体が見えた。大きい！　いち、にぃ……四階建て、になるんだろうか。ボースマーケットも大きかったけれど、中央工房はそれを遥かにしのぐ巨大建築物だったのだ。
「すごいわね……」
「うん。まあでも、驚いてばかりではいられないね。そろそろ支部に行ってみよう」

自動階段で降りて、地図を参考にして大通りを南へと歩く。
「エステル、あれを見て」
ヨシュアが通りの左右に立つ細い金属の長い棒を指さした。棒の先には角灯のようなものが付いている。
「導力灯だ」
「えっ！」
びっくりしたのはその数だ。首を振って確認すると、大きな通りにさほどの距離をおかずに延々と立っている。こんなに多くの導力灯が並んで点いたら、夜でも道がかなり明るくなるのではないだろうか。それはもちろん街道沿いにだって導力灯はあるけれど、ここまで短い間隔では連なってはいない。これがぜんぶ導力で動いているのか……。
どうやらツァイスは、工房都市の名に恥じない、導力器で溢れた街のようだ。
しばらく歩くと、通りの左手に見慣れた看板——盾と篭手の組み合わせ——があった。
遊撃士協会の支部だ。
扉の鈴を鳴らしつつ入る。
カウンターには東方風の衣服を着た年上の女性がいた。
「あの～、あたしたち——」
「ようやくのご到着ね。エステル、ヨシュア。ツァイス支部へようこそ」
いきなり名前で呼ばれてエステルは声を失う。びっくりしてしまった。

「……僕たちをご存じなんですか?」
「ルーアン支部のジャンから、すでに連絡は受けていたから。栗色のツインテールの女の子と琥珀色の瞳で漆黒の髪の男の子……」
　女性は切れ長の目でエステルたちを交互に見やった。
「まさに、あなたたちのことね?」
「な、なるほど……」
「私の名前は、キリカ。ツァイス支部を任されている」
　服だけでなく彼女は名前も東方っぽかった。おそらく出身が東のどこかの国なのだろう。
「以後、お見知りおきを。さっそくだけど所属変更の手続きをしてもらうわ」
　ハキハキとした口調で言った。さっぱりとしていて明るい性格の女性のようだ。
　キリカの前で、エステルたちは移籍の手続きを済ませる。とはいえ、今はツァイス支部では遊撃士としての急ぎの仕事もなく、街は平和だという。
「それで、キリカさん。聞きたいことがあるんだけど――」
「カシウスさんなら、残念だけどツァイス地方には居ないわね。少なくとも、ここ数ヶ月はこの支部を訪ねてきていない」
「は～っ、そっかあ……」
　がっかりしなかったと言えば嘘になる。けれど、そんなに容易く手掛かりを得られないことも覚悟していた。

「となると、居るとすれば可能性のあるのは王都か、それとも……」
　考えこむヨシュアにキリカが言ってくる。
「だけど別の問題については手がかりをあげられると思う。これを持っていきなさい」
　キリカは封をされた手紙を差し出してきた。
「中央工房の責任者であるマードック工房長への紹介状。このツァイス地方では市長と同じ立場にいる人ね」
「ひょっとして……黒い導力器の件ですか?」
　ヨシュアが訊いた。
「ええ。市長邸での話を聞く限りかなり謎めいた代物のようね。まずは工房長に会って相談してみるといいでしょう」
「な、なんかメチャメチャ用意いいわね～」
　先ほどからキリカは自分たちが何も言わなくてもすべて先回りして答えている。尋ねる前に、聞きたかったことを要領よく伝えてきた。キリカの頭の回転の早さにエステルは驚いていた。
「キリカさん、まさか超能力者とか?」
「あなたたち遊撃士の援助(サポート)が私の仕事。届けられた情報を判断してしかるべき用意をしておいただけよ」
　そうしれっと言ってのけた。
「気にすることはないわ。何か事件が起こった時に働いて返してもらうから」

「あはは……うん、その時は任せて！」
　胸を張って応えた。
　いつだってそのつもりだ。エステルは望んで遊撃士になったのだから。

†　†　†

　中央工房の受付嬢に紹介状を見せ、二階にあるという工房長室へと案内される。部屋の中には、がっしりした身体つきの初老の人物がいた。白衣を着ている。
　この人物がマードック工房長なのだろう。
　机の上で書類をにらんでいた彼は、エステルたちの入室に気づいて顔を上げた。優しそうなブラウンの瞳でエステルたちを見る。
「やあ、待っていたよ。エステル君とヨシュア君だね」
「あ、はい。初めまして、工房長さん」
「お忙しいところを失礼します」
「いやいや。気にしないでくれたまえ。遊撃士協会には――特にカシウスさんには、お世話になっているからね」
「えっ⁉　工房長さんって父さんの知り合いなの⁉」
「はは、知り合いというかカシウスさんは大の恩人だよ」

　言いながらマードック工房長は目を細める。
「この中央工房は、大陸でもっとも導力技術が進んでいる場所といっても過言じゃない。その技術をめぐって色々とトラブルが絶えなくてね。どうしても対応に困った時はロレント支部に連絡して彼に来ていただいていたんだ」
「どうりでいつも出張が多かったわけだね」
「そ、そうだったんだ……」
　エステルとしては複雑な気分だった。あの父親は、そんなことはちっとも自分に教えてくれなかった。エステルにとって、カシウス・ブライトはどこにでもいるだろう普通の父親なのだ。そんな父が英雄のように語られるのは、誇らしいよりも戸惑いのほうが強くて。でも……。
（父さんは立派な遊撃士なんだ……）
　胸のなかに温かい何かがこみ上げてくる。
「恩人のお子さんたちが訪ねてきてくれたんだ。喜んで相談に乗らせてもらうよ」
「えへへ……ありがと、工房長さん」
「少し話は長くなりますが……」
　エステルたちは黒い導力器をめぐるこれまでの経緯を語った。話が進むにつれて、工房長の眼差しが厳しいものへと変わってゆく。
　すべてを聞き終えた後、マードックは深い息をついた。
「その導力器を拝見しても構わないかね？」

「うん、もちろんよ」
黒々とした球に近い形の黒い導力器を渡す。
その表面には複雑な溝が刻み込まれており、意味ありげな紋様のようにも見える。手渡した導力器を観察するマードックの瞳からは、先ほどまで感じていた優しげな雰囲気が消えて、研究者がもつ厳しさが溢れていた。
「ううむ……たしかに得体の知れない代物だ……明らかに最近になって造られたものだが、ナンバーが刻まれていないとは」
「ナンバー？」
エステルは首を傾げる。
「導力器の外殻(フレーム)に刻まれている製造番号のことですか？」
「そのとおりだ。導力器には、ほぼ例外なく、いつどこで造られたのかを表す製造番号が刻まれている。これは、リベールだけでなく他の大陸諸国でも事情は同じでね。五十年前に、導力器が発明された時からの伝統なのだよ」
「へ～、そうだったんだ」
マードックが頷く。
「導力技術者にとってナンバリングをすることは常識とも言えることだからねぇ。試作品だとしてもそれは同じ……となると、なにか後ろ暗い目的で造られた可能性が高いかもしれない」
「後ろ暗い目的……」
「製造過程や製造所を秘密にするためですね」
ヨシュアの推理にマードックが頷く。
「まあ、はっきりとしたことは内部を調べないと判らないが……うむむ？」
「どうしたんですか？」
「まいったな……この導力器には調整用に開けるための蓋が見当たらない。よく見れば継ぎ目もないし……。どうやって組み立てたんだろう？　うーん、このままだと中を調べるのは難しそうだな」
「え～、そんなぁ……」
ここまで来て手がかりがなくなるのは困る。
「あ、だったら外側を切断しちゃえばいいんじゃない⁉」
「まあ、たしかにそうするのが手っ取り早いかもしれないが……しかし、カシウスさん宛てに届いたものを勝手に傷つけるのはちょっと気が引けるなあ」
「そ、そっか……」
三人の間に沈黙が落ちる。
口を開いたのはヨシュアだった。
「例の博士にだったら任せられると思うんだけど……」
「あ……同封されていたメモの？　たしかに、その博士だったら任せちゃってもいいかもね。実は、その導力器と一緒にこんなメモが入ってたんだけど……」
エステルはメモを取り出すとマードックに見せた。

「なるほど、『R博士に調査を依頼……』か」
「そのR博士という方に心当たりはありませんか？」
「心当たりがあるもなにも……頭文字がRで、カシウスさんの知り合いといったら『ラッセル博士』に間違いないだろう」
「やっぱりそうですか……」
「ラッセル博士？　……ヨシュアも知り合いなの？」
一人だけ判った感じになっていて、ヨシュアってばずるいと思ってしまう。
「いや、面識はないよ。ただ、ラッセル博士は導力技術をこの国にもたらした人物として有名だから」
「ほう、よく知っているね。導力器を発明したのは、エプスタイン博士という人物だが……ラッセル博士はそのエプスタイン博士の直弟子の一人にあたるんだ。四十年前、彼がリベールに持ち帰った導力技術のおかげでこの国は技術先進国となった。言わば、リベールにおける導力革命の父と言えるだろう」
「ほええ。そんな凄い人がいるんだ。父さんってば、つくづく意外な人脈を持ってるわねぇ」
エステルは素直に感心してしまった。父は、いなくなってからのほうが自分たちをびっくりさせているのではないだろうか。家にいるときは、だらしないだけのへっぽこ親父なんだけど。
「へ？」
「しかし、その導力器を博士に任せるのは少し心配ではあるな。どんな事になってしまうやら……」
「なんと言うか……よくも悪くも天才肌の人でね。研究心に火がつくと想像もつかないようなことを引き起こしてくれるんだ。ああそうだった……初めて飛行船を開発した時も……」
マードックが何もない空間を見つめてぶつぶつと呟いていた。
「な、なんか遠い目してる……」
「色々とあったみたいだね……」
「……コホン、これは失礼。まあ、たしかに博士ならその黒い導力器の正体を必ずや突き止めてくれるだろう。紹介するから相談してみるといい。ちょうどいい案内人もいることだし」
「案内人？」
「ああ、ちょっと待ってくれ。実はラッセル博士のお孫さんがこの工房で働いているんだ」
そう言って工房長が部屋に呼んだ人物を見て、エステルもヨシュアも驚いたのだ。
「ティータちゃん！」
「あれれ。エステルさん、ヨシュアさん？」
現れたのは、カルデア隧道で出会い、少し前に別れたばかりの少女、ティータだった。
「おや、君たちは知り合いだったのか？」
「ちょっと前に知り合ったばかりだけど」
「カルデア隧道で会って、ここまで案内してもらったんです」
ヨシュアがそう話すと、工房長は「ああ」と頷いたあとで思い出したようにティータに向かって言う。
「そういえば君、ひとりで隧道まで導力灯を替えに行ったそうじゃないか」

「あ」
「危険だと言っておいただろう。誰かそういうときはおとなを呼びなさい」
「は、はい」
　ティータがしょぼんと肩を落としてしまう。
「ま、まあ、無事だったし、だいじょうぶだってば。ええとその、ティータちゃんが来るとは思わなかったわ。しかも、有名な博士のお孫さんだったなんてね」
「どうりで導力器の扱いにも慣れているわけだ」
　ヨシュアも励ますように言った。
　おずおずと顔をあげたティータが照れたように微笑む。
「え、えへへ……そんなことないですよー。おじいちゃんはともかくわたしはただの見習いですから。おじいちゃんはほんと、すっごいんです！」
　そう言うティータからは祖父への尊敬と憧れが感じられて。
「それであの、おじいちゃんに相談って、遊撃士のお仕事と関係が？」
「うーん……ま、半々ってところかな。これがまたフクザツ怪奇な事情でね～」
「詳しい話は、おじいさんに会った時にさせてもらうよ」
「あ、はい、わかりました。えと、わたしの家は街の南西の方にあるんです。導力階段（エスカレーター）を降りてまっすぐ歩けば南だから、それから西のほうに曲がれば到着です」
「じゃあ、案内をよろしくね」

「はい！」
　エステルたちは工房長に礼を言って部屋を出た。
（今度こそ、黒い導力器について何か判るはず！）

†　†　†

　その家は、外から見る限りはさほどヘンには見えなかった。どこにでもありそうな造りの二階建ての家だ。ただ、丸い屋根の付いた工房らしき建物が併設されていることと、壁の煉瓦のあちこちが色違いになっているのが特徴だった。色違いの壁はどうやら後から補修された箇所だと見当がつく。
　扉を開けて入ると、そのまま工房に繋がっていた。
　茶色の長衣（ローブ）を着た老人がエステルたちに背中を向けてなにやら作業していた。頭のてっぺんだけがツルツルで、頭頂部を囲むように白い髪が逆立っている。まるで白い王冠を被っているかのような髪形をしていた。
「おじいちゃん、ただいまぁ」
　ティータが前に出て博士に声をかけた。
「おじいちゃん、あのね。このお姉ちゃんたちが相談したいことがあって……」
「ん……？」

　ぶつぶつと呟いていた博士がティータの方を向く。
「おお、ティータ！　いいところに戻ってきたのう！　今から試験(テスト)をするからデータ収集を手伝ってくれ」
「え、でも、あのね……」
「今度の発明は生体感知器を無効にする導力器じゃ。特殊な導力場を発生して走査機(スキャナー)をごまかすわけじゃな」
「ほ、ほんとー？」
　ティータの声が弾んだ。
（むむ。なんか雲行きが怪しい方向になってない？）
「ホントもホント。掛け値なしの新発明じゃ！　ほれほれ、いいから、起動試験(テスト)の手伝いをせい！」
「うんっ！」
　ティータは勢いよく部屋から駆けだして行き、すぐに作業着に着替えて戻ってきた。
（ちょ、ちょっと！　あたしたちの紹介は〜？）
　ラッセル博士とティータは、奥にある台の両脇にある四角い装置の前に移動して、複雑そうなその機械を動かし始める。
　エステルたちの存在は完璧に忘れ去られてしまっていた。博士に限れば、そもそも気づいてもいなかった。二人とも新しい発明品に夢中になっている様子だ。
「これ、まずくない」

「うーん。しばらくかかりそうだね」
　小声でそう言葉を交わしつつ入り口で所在なげに立っていると——。
「ほれ、そこの黒髪の！」
　振り返ったラッセル博士がヨシュアのほうを見ていた。
「え、僕のことですか？」
「他に誰がおる？　二階の本棚から『導力場における斥力値』というノートを持って来るんじゃ！　ほれほれ、とっとと急がんか！」
「わ、判りました」
　博士の声には有無を言わさぬ迫力があった。返事をしたヨシュアは二階への階段を上がっていく。
「ちょ、ちょっとヨシュア……」
「そこの、触覚みたいな髪したの！」
　今度はエステルに向かって言ってきた。
「しょ、しょっかく⁉　あ、あ、あんですって〜⁉」
　自分の髪を触覚扱いされたのはエステルにとってもちろん初めてだ。
「ぼけーっとしとらんでコーヒーでも淹れてこんか！」
「な、なんであたしがっ⁉」
「ちなみにわしはブラックじゃ。泥のように濃いやつを頼むぞ」
「聞いてないし……」

エステルはがっくりと肩を落とした。

「はあ、もう、わかったわよ。とーっても濃いやつを淹れてあげるわ！」

ぐぐっと腕まくりして、エステルは実験室を出て炊事場がありそうなほうへと向かう。台所はすぐに見つかったが、水をどうやって出すのか、コンロに火を入れるにはどうしたら良いのか悩んでしまう。ふつうの台所ではなかった。皿とコップの代わりにビーカーやらフラスコやらが置いてあって、まさかこれでコーヒーを？　などと恐ろしいことを考えてしまう。

湯を沸かしてから食器棚の手前に置いてあったコーヒーとフィルターを見つけ、ついでにカップを四つ見つけてコーヒーを淹れた。一つは思いっきり苦くしてやる。

そのまま持っていくと、今度はおやつを要求され、散らばっている書類やら器具やらの片づけを命じられ……。

エステルたちが博士の雑用係から解放された頃には、窓の外の夕暮れの空に一番星が出ていた。

「わはは、すまんすまん。すっかりお前さんたちを中央工房の新人かと思ってな。いつものノリでコキ使ってしまったんじゃ」

ラッセル博士がソファで寛ぎながら言った。

「しかし、コーヒーは美味かったな！　そこは合格じゃ！」

「ったくもう、合格じゃ、じゃないわよ……。コーヒーだけじゃなくてさんざん手伝いをさせてさ〜」

「まあまあ、落ち着こうよ、エステル。貴重な経験をさせてもらったと思えばいいじゃない。新型導力器の起動実験なんて滅多に見学できるもんじゃないんだし」

「ほう、お前さん。なかなか判っておるようじゃの。どうじゃ、遊撃士なんぞやめて導力学者への道を進んでみんか？」

「もう、おじいちゃんたら！　ごめんなさい。エステルさん、ヨシュアさん。わたしまで実験に夢中になっちゃって……」

「あ、ティータちゃんは謝る必要はないんだからね？　はあ。『導力革命の父』とかいうからどんなスゴイ人かと思ったけど……ここまでお調子者のお爺さんとは思わなかったわ」

「わはは、そう誉めるでない」

「誉めてないけど」

「謙遜も過ぎれば嫌味じゃぞ」

「なんであたしのほうが謙遜してることになるのよ！」

「……エステル、エステル、乗っかっちゃってどうするのさ」

「うぐ」

「わはははは。しかし、まさかカシウスの子どもたちが訪ねてくるとはのう。わしのほうもビックリじゃよ」

「……あ、やっぱり博士って父さんの知り合いだったんだ？」

「うむ、けっこう前からのな。あやつが軍にいた頃からじゃから二十年以上になるか」

「カシウスさんなら、わたしも会ったことがありますよ。おヒゲの立派なヒトですよね？」

ティータにまでそう言われて、エステルもヨシュアも驚いた。本当にカシウス・ブライトの人脈

は意外性に富んでいる。
「でも、そういうことなら……アレを預けてもよさそうね」
　ティータが不思議そうな顔をした。
「アレ、ですか？」
「なんじゃ、何かあるのか？　そういえばお前さんたち、わしに相談があるそうじゃな？」
「うん、実はね……」
　手短に経緯を説明しつつ、エステルは黒い導力器を取り出して、テーブルの上に置いた。
　漆黒の塊を見つめて、ラッセル博士はあごをさすった。
「ふむ、これは興味深いのう。製造番号がないのもそうだがたしかに外側に継ぎ目の類が見当たらん。しかもこの外殻（フレーム）は……」
　ラッセルは腰帯に引っ掛けてある工作用の道具を手にすると、そのまま黒い導力器の表面に力いっぱい押し当てた。
「ふむ！　ぬ……おおお！」
「な、なにしてるの？」
「切断機（カッター）だね。刃が硬い合金でできているんだ」
　よほど強い力で押し込んでいるのか、博士の額に青筋が浮いていた。
「おお……やはりか……ほれ、見てみるがいい」

　導力器に押し当てていた刃を離して、エステルたちのほうへと向けてくる。
　刃の当たっていたはずの導力器の表面は――。
「あ、あれっ？」
「おじいちゃん、これ、キズ一つ付いてないよっ」
　エステルはティータと驚きの声を上げ、ヨシュアが眉間にしわを寄せて黙り込んだ。
「どうやら、この外殻（フレーム）はわしが知っているどんな金属よりも硬い素材でできているようじゃ。切断して中を調べるのはかなり難しいかもしれんな」
「そ、そんなにとんでもない代物なんだ……」
　目の前の博士は導力器についてこの国で誰よりも詳しいはずなのだ。その博士が知らない金属でできているなんて……。
「困ったことになりましたね……」
「ま、工房にある頑丈な刃を使えば、外殻の切断は時間をかければできるじゃろ。しかしその前に、測定装置にかけてみるべきかもしれんな」
「測定装置？」
「さっきの実験でも使っていたあの大きな装置のことですよ。導力波の動きを即時（リアルタイム）に測定するための装置なんです」
　工房の奥に据えられていた大型機械のことらしかった。
「そ、その装置を使うとどうなるわけ？」

「簡単に言うと、この導力器がどんな働きをするのかが判るんじゃ。もっとも導力波の動きだけではあくまで推定の範囲内に留まるがな」
「それでも重要な手がかりを得られる可能性が高そうですね」
「うむ。それじゃあ早速……」
博士の目の中に爛々とした輝きが灯る。昼間に実験しているときも常にそんな瞳をしていた。
ティータが言った。
「でも、おじいちゃん。そろそろゴハンの時間だよ？　食べてからじゃないとダメだよ」
「えー」
博士は孫娘に向かって、眉を下げ、オモチャを取り上げられた子どものような情けない声を上げた。

† † †

すっかり夜だった。
窓の外の空は黒くなっていて、向かいの家々には明かりが灯っている。
さすがに工房都市らしく、窓から漏れてくる明かりのほとんどが蝋燭や油の光とは異なる導力灯の光のようだ。ゆらゆらと揺れる炎と違って一定の強さで輝き続けている。この街は蝋燭やランプよりも導力の明かりのほうが多い街なのだ。その事実にエステルはふたたび感嘆してしまう。今頃は工房へ来る途中に見かけた街灯たちも、さぞまばゆい輝きを放っていることだろう。

夕食をごちそうになってから、エステルたちはふたたび工房一階の実験室に集まった。
測定装置の台の上には、すでに黒い導力器が設置されている。実験の準備が整っている。
「それでは《黒の導力器（オーブメント）》の導力波測定実験を開始する」
博士が告げた名称にヨシュアが反応する。
「《黒の導力器》？」
「なんか、まんまなネーミングねぇ」
「シンプル・イズ・ベストじゃ。とりあえず名前がないのは不便じゃからの。よし、それでは始めるぞ。ティータ。装置の起動を頼む」
「うんっ」
装置の前で待機していたティータが、待ってましたとばかりに装置を操作した。
ブンと音を立てて操作卓の釦（ボタン）に光が点る。結果を即時観測するための画面が黒から鮮やかな緑色へと変わり、縦横の格子と、なにやら波の形をした様々な色の光の線が幾本も描かれた。
「出力を45％に固定……各種測定器のスタンバイ開始じゃ」
「了解……」
博士の指示にティータが返事をして、次々と他の装置の釦にも明かりが点り始めた。
画面に踊る光を受けて、赤、緑、青、実験室の壁がカラフルな光で彩られる。博士とティータの顔にも色とりどりの輝きが映っていた。

「うんっ。各種測定器、準備完了だよ」
「さーて、ここからが本番じゃ。入出力端子が見当たらない以上、中の結晶回路に導力波を直接ぶつけて反応を探るしかないわけじゃが……」
博士はわざとらしく一呼吸置いて、ニヤリと口ひげを持ち上げた。
「そういうときこそ、この測定装置の真価が発揮されるというわけじゃ！」
「ノ、ノリノリねぇ……」
「では、押すぞ」
博士が測定装置の釦を押した。
低く唸るような音が響く。
しばらく見ていると、《黒の導力器》の乗った台が光に包まれ始めた。
「ま、まぶし……」
「なるほど、ああやって結晶回路に負荷をかけるのか」
どうやらヨシュアには何が起こっているのか、おぼろげながら理解できているみたいだった。改めてエステルはヨシュアの頭の良さに舌を巻いてしまう。
「よしよし。ティータや。測定器の反応はどうじゃ？」
「う、うん……なんだか、ヘンかも……」
「なぬ？」
「タコメーターの針がぶるぶる震えちゃって……」

機器を見つめるティータの声は戸惑っていた。
「あっ！　ぐ、ぐるぐる回り始めたよ⁉」
「なんじゃと⁉」
エステルには何が起こっているのか判りはしなかったが、異常が起きていることだけは感じ取れた。手に力が入る。何が起きても対処できる気持ちでいないと。
次の瞬間、明るい白い光に包まれていた導力器が黒い閃光を放った。
（あ、この感じ！）
実験台の上の白い光がまず掻き消され、黒い導力器を中心にして部屋のなかに闇が満ちてくる。
これは――ルーアンの街で起こったのと同じだ！
「きゃあっ⁉」
「な、なんじゃこれは⁉」
ティータの叫び声とラッセル博士の驚く声が重なった。
「ヨシュア、これ……⁉」
「あの時の黒い光……！」
押し寄せてくる闇に呑み込まれたかのように、ぷつ、ぷつ、と点っていた装置の釦の光が次々と消えていく。
壁に取り付けられていた導力照明が消えた。
実験室が闇に満たされたのだ。

†　†　†

もしこのとき、『工房都市』ツァイスの上空を飛行艇が飛んでいれば、街の様子はこんな風に見えただろう。
始まりは西南に位置する小さな家──ラッセル博士の工房だ。
建物の明りが、ふっと息を吹きかけたかのように忽然と消える。単なる導力灯の故障、ではない。すぐに明らかになる。
隣りの家から漏れていた光もすぐに消えてしまう。
その隣も、さらにその隣の家も。
家々の明りが次々と消えていったのだ。
まばゆく煌いていた大通りの街灯も南から北へと順に消えた。
闇が、紙に落ちた水が染みてゆくように街全体に広がってゆく。
闇の円が中央工房に近づいてゆくと、その現象が導力照明だけに作用していたのではないことが明らかになる。
同心円状に広がっていく闇が導力階段に達した途端に、夜間でも動き続けていた自動階段が止まってしまった。かすかな導力の唸りさえも聞こえなくなる。
導力の街を動かしていた機械の数々がまるで呼吸を止めた獣のように静かになり、入れ替わるように街の人々たちがざわめき始める。街の人々は、建物から通りへと飛び出し、導力器が動かなくなったのが我が家だけではないことに気づいた。
混乱が街に広がっていった。

†　†　†

「たいへん！」
街から光が消えているのを見て、エステルは声を上げた。
外が人の声で騒がしくなったので、ヨシュアとともに様子を見に出てきたのだ。
街の明かりが一つ残らず消えている。これはただ事ではない。しかも、博士の実験が原因なのも予想がつく。
実験室で起きたことが街に広がっている！
「エステル、博士に実験を中止してもらおう」
「そ、そうね！　ヨシュアはこっちを見張ってて！」
エステルはきびすを返して実験室へ走った。
途中にある廊下の照明もぜんぶ消えているから躓かないようにするのが大変だった。
「お、おじいちゃん、これ以上はダメだよぉ。測定装置を止めなくっちゃ！」
「ええい、止めてくれるな！　あと少しで何かがつかめ……」

実験室の扉越しにティータと博士のやりとりが聞こえてくる。未だに黒い光に満たされている部屋のなかへエステルは飛び込んだ。
「ちょ、ちょっと！　街中の明かりが消えてるわよ！」
「ふえっ？」
「街中じゃと⁉　なんと……！　ええい、仕方ない！　これにて実験終了じゃああっ！」
闇のなかで博士が装置に向かって手を伸ばした。
すると――。
照明が灯った。部屋がふたたび明るくなる。
「あ……も、元に戻った……？」
「はううう〜……」
壁の導力灯には光が戻り、測定装置から聞こえていた唸るような音は止まっていた。
「測定装置の方は……。ダメじゃ、何も記録しておらん。ということは、生きていた導力器は《黒の導力器》のみ。あとは根こそぎということか……」
「よかった……実験を中止したみたいだね」
ヨシュアが開けっ放しだったドアを抜けて入ってきた。
「あ、ヨシュア！　外の様子はどうなの？」
「うん……照明はもとどおりになったみたいだ。まだ騒ぎは収まっていないけどね」
「そっか……でも、一体全体、何が起こっちゃったってわけ？」

街中の明かりが消えてしまったのはどうしてなのだろう。エステルには見当もつかない。もし判る人がいるとすれば……。
ラッセル博士が自分の顎を撫でながら言う。
「そうじゃな……あえて表現するならば『導力停止現象』と言うべきか」
「導力停止現象？」
（って、なに？）
「導力器内を走る導力が働かなくなったということですね」
ヨシュアが言った。
「なんでそこまで理解しちゃってるの⁉」
「エステルってば、僕はただ推理しただけだよ」
「あたし、時々ヨシュアの頭のなかを割ってみたくなるのよね……」
「怖いことは言わないで」
「これって、やっぱり《黒の導力器》が原因なのかな？」
「うむ、間違いあるまい。しかし、これほど広範囲の導力器を停止させるとは。むむむむむむむ……こいつは予想以上の代物じゃぞ。面白い、すこぶる面白いわい！」
「お、面白がってる場合じゃないと思うんですけど〜」
予想外の事態だったとはいえ街中を驚かせてしまったのだ。何も被害が出ていなければよいのだけど……。

「ハ～カ～セ～ッ‼」
　怒鳴り声がした。
　実験室に飛び込んできたのは、顔を真っ赤にしたマードック工房長だった。
「おお、マードック。いいところに来たじゃないか」
「いいところ、じゃありません！　毎回毎回、新発明のたびにとんでもない騒ぎを起こして！　街中の照明を消すなんて今度は何をやったんですかッ⁉」
　早い！　まだ明かりが復旧したばかりなのに、原因は博士と睨んでここまで駆けつけてきたなんて！　しかも、いま「新発明のたびに」って言わなかった⁉
（ひょっとして、これって博士の日常茶飯事ってこと⁉）
　エステルとヨシュアは思わず顔を見合わせてしまう。
　飛び込んできた工房長に向かってラッセル博士が心外そうな顔を向ける。
「失敬な。今回はわしは無関係じゃぞ。そこに置いてある《黒の導力器》の仕業じゃ」
「そ、それは例の……」
「おぬしが持ってこさせたんじゃろ？」
「なるほど、それが原因ならこの異常事態も頷けるが……」
　考えこんでしまったマードック工房長だったけれど、次の瞬間には真っ赤な顔になって博士に詰め寄った。
「だ、だからといってアンタが無関係ということがあるかあっ！」

「ちっ、そこに気づくとは！」
「はーかーせー」
「判った判った。発明の一つ二つくれてやるから、それで勘弁せい」
「私は懲りろって言ってるんです！」
「実験にはたまの失敗が付き物なんじゃ。いつもそう言っておるだろうが」
「あなたは毎回でしょーが！」
「いや、十回に一回は成功しとる」
　しれっと言うラッセル博士に、工房長の顔が赤を通り越して青くなった。こめかみに青筋が浮かんでいる。対照的にラッセル博士は表情一つ変えていない。柳に風だ。工房長の言葉が熱を帯びれば帯びるほど、博士の口調は穏やかなものになってゆく。まるで打ち合わせた言い合いをしているみたいだ。
「息が合ってるわね～」
　ヨシュアも頷く。
「いつもあんな感じなんだ？」
「あう……恥ずかしながら……」
　申し訳なさそうにティータが頷く。
　半刻あまりにも渡って工房長のお説教は続いたが、博士が改心したかどうかは怪しい。
　終わったときには真夜中も近くなっていて、夜も遅いということで、そのまま博士の家に泊めて

もらうことになった。ヨシュアは空き部屋を借り、エステルはティータと一緒の寝台だ。
寝床に入りながらエステルは今日の騒動を一から思い返していた。
カルデア隧道を通って、導力技術の粋を集めた工房都市ツァイスに着いた。巨大な工房の威容に驚き、ラッセル博士という稀代の天才にして変人と出会って、黒い導力器の謎に迫った。そして、《黒の導力器》には、どうやら『導力停止現象』なるものを引き起こす力があるらしいと判ったのだ。
(でも、父さんってば、どこでそんなものを手に入れたんだろう?)
そもそも、あの導力器は何のために作られたものなのか……。
一つ判ると、二つの謎が出てくる。
そして、どうやら謎を解き明かさないと、父の行方は判らないらしい。
(まったく父さんってば世話を焼かすんだから)
隣のティータの安らかな寝息を聞きながらそんなことを考えているうちに睡魔がやってきた。
(父さん……)
エステルは眠りの淵を転げ落ちていった。

† † †

翌朝――。
博士の家でティータの作る朝食をご馳走になってから、エステルとヨシュアはティータとともに

中央工房へと向かった。
ラッセル博士が、ひと足早く《黒の導力器》を工房へと持ち込んで調べているのだ。
博士のいるという三階の工作室を訪れる。
「ええい！　これもダメかっ！」
ドアをくぐった途端に声がした。博士の声だ。奥の工作台の前に立って大声を張りあげていた。
「おじいちゃん！　お手伝いに来たよ」
ティータの掛けた声に博士の顔が上がる。
「おお、ティータ。おや……お前さんたちも来たのか」
「やっぱり気になっちゃって。で、いったい何してるの?」
「見ての通りじゃ。工作機械を使って《黒の導力器》の外殻を切断しようとしているんじゃが……これがなかなか上手くいかなくてな」
「どういうことですか?」
「百聞は一見に如かずじゃ。見せてやろう。……ポチッとな」
博士が工作台の上に乗っている機械の釦を押した。
台に取り付けられている鋼の円盤がぐるぐると回転し始める。
「わっ……なにこれ!?」
「工作用の丸ノコですよ。特殊合金製で、大抵のものは切断できちゃうんですけど……」
ティータが教えてくれた。

薄い鋼の円盤が縦に回転している。円盤の縁が刃になっていて、どうやらそこに物を当てて切断するらしい。目に留まらないほどの速さで回転している円盤を見ていると、迂闊に指を出したら、すっぱりと切れてしまいそう。鋼さえ切るというのは本当みたいだ。
「へえ、これなら……」
博士が作業台の上で《黒の導力器》に手を当てゆっくりと丸ノコに近づけてゆく……。
導力器が回転する刃に当たる。
火花が散った。
次の瞬間《黒の導力器》に変化があった。
昨夜ほど激しくはないが、黒い球体から黒い光が四方に放射されたのだ。すると、シュウウウンという音と共に丸ノコが停止してしまった。
「と、止まっちゃった……」
「昨日と同じ現象ですね」
ヨシュアが言って、博士が頷いた。
「『導力停止現象』じゃ。この黒いヤツは干渉しようとするあらゆる導力器の機能を停止させてしまうらしい。この丸ノコも導力で動いているからの」
「でも、おじいちゃん。夕べみたいに周りに広がったりしないの?」
「うむ、いいことに気づいたな。どうやら、この停止現象は周囲で稼働中の導力器に連鎖して広がっていくものらしい」

「稼働中のものに連鎖……博士、それはようするに、動いている導力器があれば、その停止現象を発生させてから、さらに外側にある次の導力器に同じ現象を引き起こす、ということですか?」
「理解が早いのう。そうじゃ。有効範囲は、およそ五アージュ。逆に言ってしまえば、範囲内に稼働中のものがなければそれ以上は広がらんというわけじゃ。そういうわけで、周りの導力器から遠ざけてこうして実験しておるんじゃが……」
「なるほど……そんな法則があったんですか」
ヨシュアが頷いている。
博士が実験を部屋の真ん中で行っているのは周りの導力器を遠ざけるため、ということか。
「じゃが、それが判ったところで、肝心要の工作機械を止められては中を調べることはできん……これは困ったことになったのう」
「なんとか人力で切断することはできないの? 気合いと根性で、とかさ」
「無茶だよ、エステル。特殊合金製の切断機でも傷つけられなかったのを見ただろう?」
「あ、そっか……うーん、だったら別の何か……たとえば火を使うとかは? 溶鉱炉に入れて溶かしちゃうとか」
「そ、そんなことをしたら中もタダじゃ済みませんよぅ」
ティータに困った顔をされてしまった。
良い方法はないのだろうか……。
「別の何かを、か……」

博士の顔が明るくなった。何か閃いたようだ。
「なるほど、イケるかもしれんな。ようは導力を使った工作機械に頼るから問題なんじゃ。この丸ノコを、導力以外で動くようにしてしまえばいい」
「機械を、導力以外で動かせるようにする？」
「そんな方法があるんですか？」
「『内燃機関』といってな……火を燃やして導力とは異なるエネルギーを生成する仕組みがあるのじゃ。元々、導力器よりも歴史の古い発明なんじゃがな。導力器が発明されてからは効率が悪くて使われなくなった。ただ、工作機械くらいなら簡単に動かすことができるぞ」
「そんなものがあるんだ……」
「ここの倉庫にもあったはずじゃ。そいつを取ってきて繋げれば……ふむ、おまえさんたち、今から言うものを取ってきてくれんか？　その間にわしとティータとで、こいつを内燃機関で動かせるように改造しておこう」
「まかせて！」

その日いっぱいかけて、エステルたちも必要なものを揃えるのに協力し、夕方には丸ノコを動かすために『内燃機関』を取り付ける作業が終了した。
そして――。

「ポチっとな」
博士が、改造した工作機械のスイッチを押し込む。油の臭いがかすかにしたかと思うと、交換した動力部から大きな振動音が響いた。同時に丸ノコが回転を始める。
「わ、動いた……」
「導力機関と比べるとかなり音がするんですね」
ドッドッドッ、と確かに導力部である内燃機関から大きな音がする。音だけじゃなくて、油の臭いも漂ってきた。
「うむ、それが難点の一つでな。だが予想通り、《黒の導力器》の力が発動する恐れはなさそうじゃ。では、このまま解体を始めるぞ」
エステルはごくりと息を呑んだ。いよいよ《黒の導力器》の秘密が判るかもしれない。
回転数を上げた丸ノコが《黒の導力器》と接触した。
激しい音を立てて、接触面から火花が飛び散る。
「わわっ……！」
「よし、ひとまず止めるぞ。どれくらい外殻（フレーム）が削れたのか確認してみよう」
エステルたちは《黒の導力器》を覗き込む。
外殻（フレーム）の表面に、髪の毛数本ぶんほど、ほんのわずかに溝がついていた。
「た、たったこれだけ？」
エステルの横で、ティータも大きな瞳を見開いている。

「信じられない……特殊合金製の丸ノコなのに」
「とんでもない材質ですね……」
「しかし根気よく続ければなんとか切断できそうじゃな。まあ、丸ノコを何枚も交換する必要はありそうじゃが」
「ガマンくらべってわけね」
すぐに結果は出なかったが、目処は立ったわけだ。
一歩前進である。
と、実験室のドアが開いた。マードック工房長が入ってくる。
「博士、ちょっといいですか？」
「なんじゃ。なにか面倒でも起こったか？」
「エルモの旅館から博士宛てに伝言がありましてね。温泉を汲み上げる導力ポンプが故障してしまったらしいんですよ。このままだと営業できないから博士に直しに来てほしいと……」
「か～っ、なんじゃと⁉　ええい！　この忙しいときに面倒な……」
「なんだったら、代わりの技師でも送りましょうか？」
「いや……あれは四十年以上前のポンコツじゃ。最近の機械しか知らん若い連中の手には余るじゃろう。ううむ、困ったことになったな」
眉間にしわを寄せる博士に、ティータがおずおずと切り出した。
「あの、おじいちゃん……わたしが代わりに修理しに行っちゃダメかなぁ？」

「なぬ？」
「前に連れていってもらった時、整備のお手伝いをしたよね？　だから、大丈夫だと思うの」
「ふーむ、たしかにお前になら任せてもよさそうじゃが……別の意味で心配じゃのう」
「そうですね。エルモまでの街道には魔獣も出ますし……」
マードック工房長が言った。
「でもでも、マオおばあちゃんが困っているの放っておけないよぉ」
「あのー」
困ってる様子の三人にエステルは声をかける。こういうときこそ遊撃士の出番だ。
「そういうことなら、あたしたちに任せてくれない？　ね、ヨシュア」
「そうだね」
ラッセル博士がエステルとヨシュアを交互に見る。頼んでも大丈夫だろうかと考えているのだろう。組んでいた腕を解くと、博士はエステルを見た。
「ふむ。せっかくだからお願いするか」
そもそも街道での安全の確保は遊撃士の役割である。幸い今は緊急の仕事も入っていない。《黒の導力器》の解体作業には時間がかかることも判ったし、なによりも知り合いになった女の子が困っているのだ。
「あのあの……ホントーにいいんですか？」
「子どもが遠慮しないの」

エステルはティータに向かって微笑んだ。

†

†

†



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.121

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/